

周防畠遺跡群
大豆田遺跡VI

長野県佐久市長土呂大豆田遺跡VI発掘調査報告書

2021. 3

佐久市教育委員会

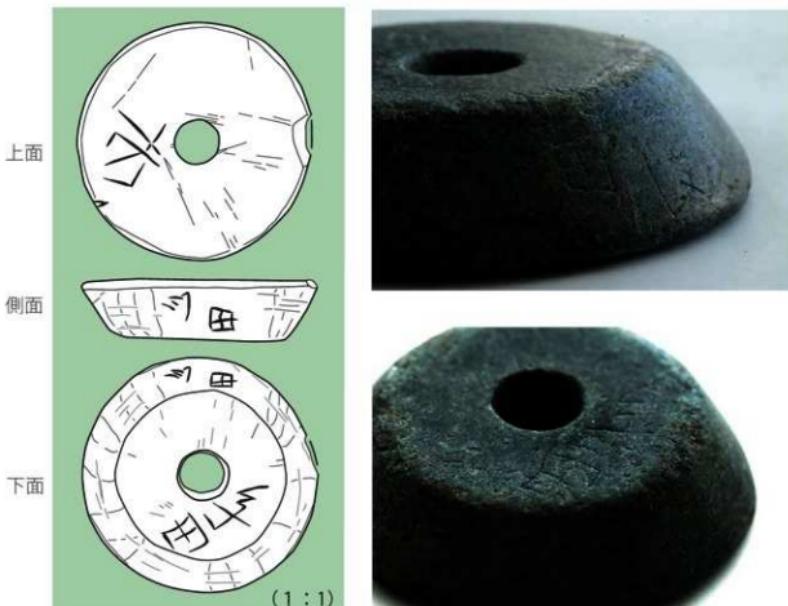
大豆田遺跡VI出土の「刻書紡錘車」について

大豆田遺跡VIは佐久市長土呂に所在します。周辺では小学校建設、区画整理事業、中部横断自動車道建設等の開発事業が行われ、多くの遺跡が発掘調査されています。今回の発掘調査は遺跡内で6番目となり、周辺部の調査事例と同じく古代の集落跡が発見されました。

今回、特に注目される出土品として「刻書紡錘車」があります。紡錘車は糸を紡ぐ道具です。土製・石製・金属製が知られています。今回の「刻書紡錘車」はほぼ完形品の石製で、奈良時代（8世紀代）の家跡から出土しました。永く使われたのか擦れて光沢があります。特徴は下面と側面に「○田」と読める刻書があり、上面にも擦れた刻線がある事です。このように文字や記号が刻まれた紡錘車は千曲市松ヶ崎遺跡の「卍」が刻まれた土製紡錘車や佐久市の同じ遺跡群内で「十」が刻まれた石製紡錘車が知られるのみで、長野県では非常に希少な資料です。

「刻書紡錘車」は全国的にみてもほぼ関東地方に発見が限定され、特に群馬県南西部から埼玉県北西部にかけてのきわめて限定的な分布を示す事が解っています。この事から、この紡錘車は地域特有の祭祀や儀礼行為に使われたのではないかと考えられています。

今回、佐久地域の近接する遺跡から複数の出土が確認されたことは、古代において佐久と上州の集落祭祀や儀礼形態に繋がりがあった可能性が指摘でき、物流のみならず人々の生活や精神面でも交流が深かった事を示す重要な発見と言えます。

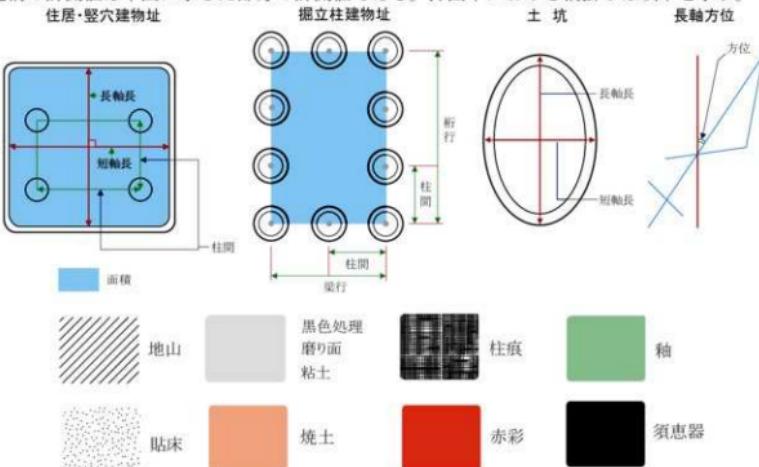


例 言

1. 本書は、JA佐久浅間 株式会社アメックが行う宅地造成工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 JA佐久浅間 株式会社アメック
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び調査面積 周防畠遺跡群 大豆田遺跡VI (NSOVI) 600m²
5. 所在地 佐久市長土呂 1725 他
6. 調査期間 平成31年4月4日～令和元年5月10日(現場発掘作業)
令和元年5月～令和3年3月(報告書作成作業)
7. 調査担当者 富沢一明
8. 卷頭は高島英之「群馬県多野郡吉井町大字神保字北高原出土の刻書鉢車について」研究紀要22群馬県埋蔵文化財事業団2004を参考とした。また、報告書作成にあたり櫻井秀雄 原 明芳鳥羽秀継(敬称略)よりご教示を賜った。記して感謝申し上げる。
9. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略記号は、住居址(H)・掘立柱建物址(F)・土坑(D)・溝状遺構(M)である。
2. 掘図の縮尺については、掘図中にスケールを示した。出土遺物観察表の単位はcmとgとした。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 遺物掘図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。()は推定値、<>は残存値である。
6. 測量座標は世界測地系を用い、調査区グリッドは公共座標の区割りに従い、間隔は4×4mに設定した。
7. 遺構の計測値は下図に示した部分の計測値である。掘図中における網掛けは以下を示す。



目 次

例言・凡例

目次・調査体制

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

- 第1節 調査の経緯
- 第2節 調査日誌
- 第3節 調査の概要
- 第4節 基本層序

第Ⅱ章 遺構と遺物

- 第1節 竪穴住居址
- 第2節 掘立柱建物址
- 第3節 土 坑
- 第4節 溝状遺構
- 第5節 ピット
- 遺物観察表

第Ⅲ章 調査成果

写真図版

抄 錄

当遺跡の「自然的環境・歴史的環境」及び「調査の方法」については大豆田遺跡Vと同一の為、佐久市埋蔵文化財調査報告書第255集「大豆田遺跡V・古仁田遺跡」を参照

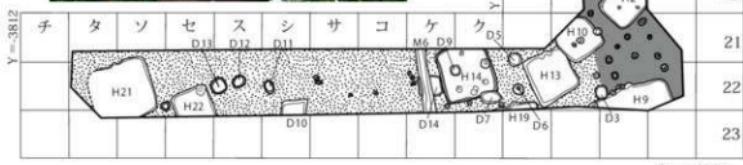


遺跡南側遠景(西より) 奥に見える住宅街が平成28年調査部

調査体制

平成31年度(令和元年)・令和2年度

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	棚澤晴樹
事務局	社会教育部長	三浦一浩	青木 源(令和元年度)
	文化振興課長	東城 洋	
	企画幹	岡部政也	吉田 晃(令和元年度)
	文化財調査係長	山本秀典	
	文化財調査係	小林真寿	羽毛田卓也 富沢一明
調査員	上原 学	久保浩一郎	
	赤羽根篤	赤羽根充江	浅沼勝男 小林妙子
	堀竈まゆみ	橋詰信子	橋詰勝子 田中ひさ子
	柳澤孝子	清水律子	堀竈保子 横尾敏雄
	依田好行	中澤 登	羽毛田利明 木内修一
	比田井久美子		



第1図 大豆田遺跡VI調査全体図

$$S = 1/400$$

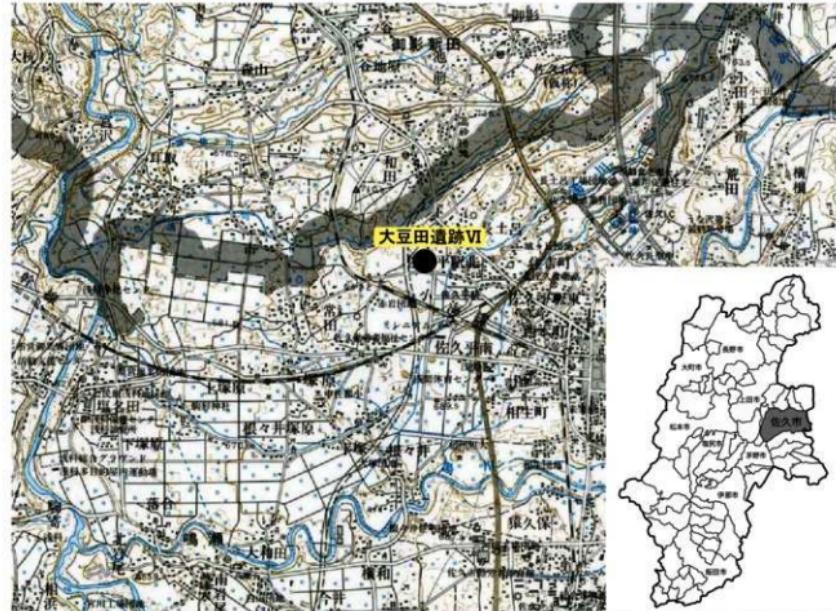
第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯

大豆田遺跡VIは周防畠遺跡群の南端に位置し、標高704mを僅かに越える台地南端に所在する。調査地点の地形は北から南へとのびるいわゆる「田切」に挟まれた低い台地で、この台地は調査地点付近で沖積低地へ変わっていく。本遺跡周辺は近年に入り、中部横断自動車道建設や新設の小学校として佐久平浅間小学校建設、区画整理事業等で多くの開発事業が行われた。また、北陸新幹線「佐久平駅」に近接している事から宅地造成事業を中心に各種開発が盛んに行われている地域である。

本地域はこのような開発に伴い多くの発掘調査がなされ、資料の蓄積が進む地域である。発見された遺構としては、弥生時代後期の所産と考えられる国内で最大級の規模となる 18×9.5 mの竪穴住居址や溝が四隅切れるタイプの方形周溝墓や円形周溝墓が集落に接して検出されている。古代においては、周辺の遺跡から佐久平では希少な出土例となる7世紀末と考えられる「川原寺式」の軒丸瓦や布目瓦が発見されている。また、西近津遺跡群からは平安時代の竪穴住居址から銅印「○子私印」が出土している。

今回、平成28年に引き続き遺跡群内においてJA佐久浅間 株式会社アメックにより宅地造成が計画され、文化財保護法93条が長野県教育委員会宛て、佐久市教育委員会に届出された。市教育委員会により該地の試掘調査が行われ、予定地内から遺構が発見された。保護協議の結果、工事により遺跡破壊が及ぶ範囲については記録保存を目的とする発掘調査を行うことになり、佐久市教育委員会文化振興課において発掘調査が実施される事となった。



第2図 大豆田遺跡VI位置図(1/50000)

第2節 調査日誌

- 平成30年9月19日 株式会社アメックより土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
- 9月20日 長野県教育委員会へ市教育委員会より30佐教文振第1295-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
- 9月26日 長野県教育委員会より30教文第7-1056号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
- 平成31年1月15日 株式会社アメックより埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
- 4月2日 株式会社アメックと市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
- 4月4日～令和元年5月10日 記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行う。
引き続き報告書作成作業を行う。
- 令和2年4月2日 株式会社アメックと市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
報告書作成業務を行う。
- 令和3年3月 報告書を刊行し、記録類・出土品を整理保管しすべての業務を終了する。

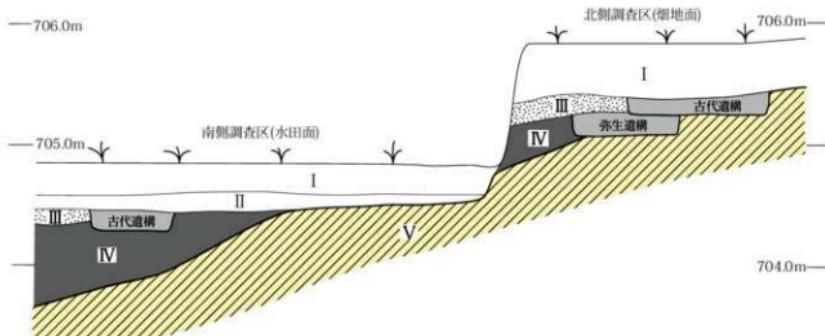
第3節 調査の概要

遺構	竪穴住居址	22軒(弥生時代後期4軒、奈良・平安時代18軒)
土坑	13基	
溝状遺構	7本	
遺物	弥生土器(箱清水式)	土師器 須恵器 灰釉陶器 石製品 鉄製品

第4節 基本層序

今回の調査地点は南西方向に向いゆるやかに傾斜する台地上である。基本層序は5層に分かれが、北側の畑地部分と南側水田部分では遺構確認面が異なっていた。北側畑地部分は浅間P1層上であり、南側水田面は黒色土層か砂層である。また、遺構も所産時期により確認面が異なり、弥生後期の住居址はⅢ層の砂が被った状態で検出された。

- 第I層 10YR4/1 褐灰色土 耕作土、しまり弱い。
- 第II層 5 YR5/8 明赤褐色土 しまり・粘性あり。水田耕作土下層部の土。
- 第III層 10YR7/2 にぶい黄橙色土 砂層で径1～2cmの小石を多く含む。
- 第IV層 10YR2/1 黒色土 しまり・粘性あり。
- 第V層 10YR5/6 黄褐色土 浅間火山灰P1層



第3図 大豆田遺跡VI土層模式図

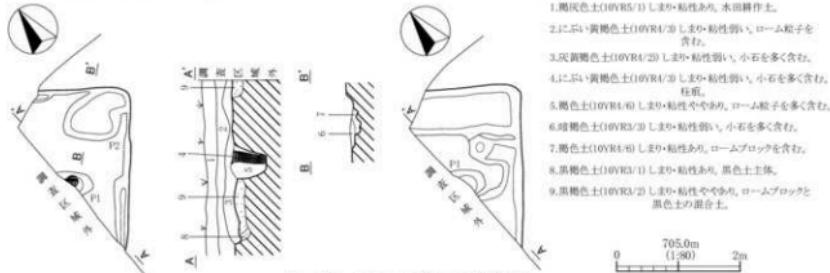
第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 積穴住居址

(1) H 1号住居址

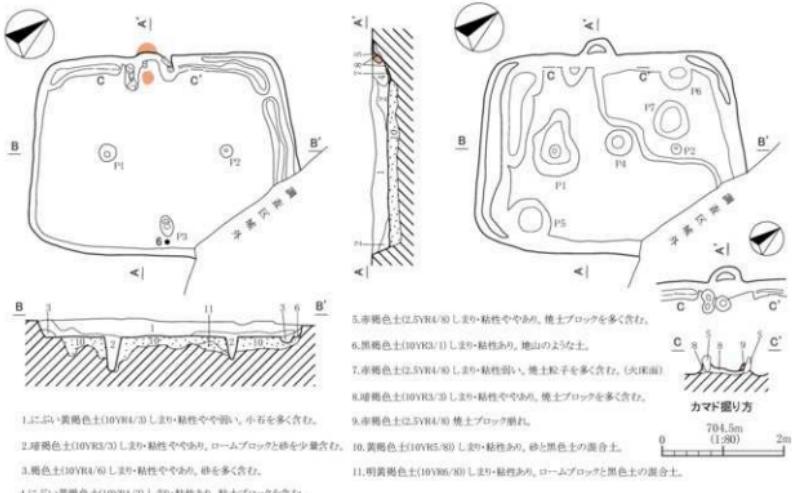
本址は調査区南側のカ-15・16Grで検出された。住居北東コーナー部分が一部検出されたのみである。形態は不明で、規模は検出長で、南北 1.42 m、東西 2.42 mを測る。検出された床面積は 2.35 m²である。壁の高さは北壁で 0.12 m を測る。ピットは 1ヶ所検出され、規模は P 1 が径 0.56 m・深さ 0.52 m であった。床は部分的に貼床が施されていた。

遺物は土師器甕や土師器壺等が出土したがいずれも小片で図示できるものはなかった。よって本址の所産時期は不明である。



第4図 H 1号住居址実測図

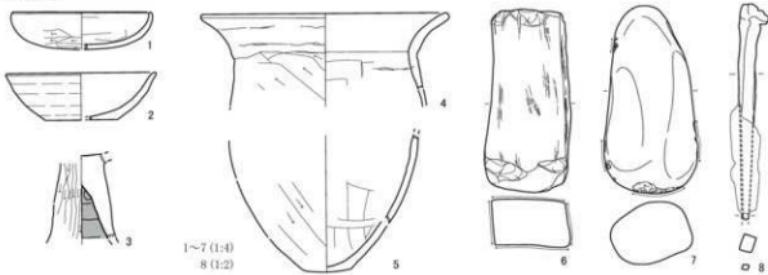
(2) H 2号住居址



第5図 H 2号住居址実測図

本址は調査区南側のオ -20・21、カ -20Grで検出された。住居南東コーナー部分が一部調査区外となる。形態は方形で、規模は南北長3.82m、東西長2.98mを測る。床面積は推定で10.49m²である。主軸方位はN-52°-Wを示す。壁の高さは南壁で0.27mを測る。ピットは掘方を含め7ヶ所検出され、P1とP2は住居の主柱穴と考えられる。床は0.11~0.21mの厚さで貼床が施され、カマド周辺は特に硬質化していた。カマドは北壁中央につくられ、礫と粘質土で袖がつくられていた。

遺物は覆土を中心に出土し、8点を図示した。本址の所産時期はこれらの出土遺物から8世紀代と考えられる。

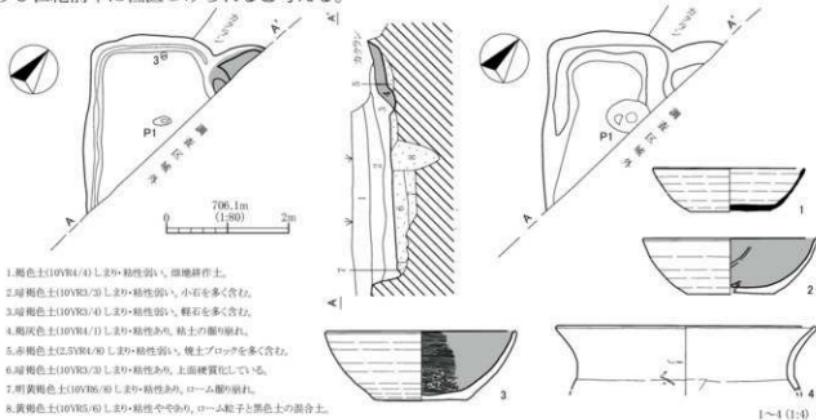


第5図 H 2号住居址出土遺物実測図

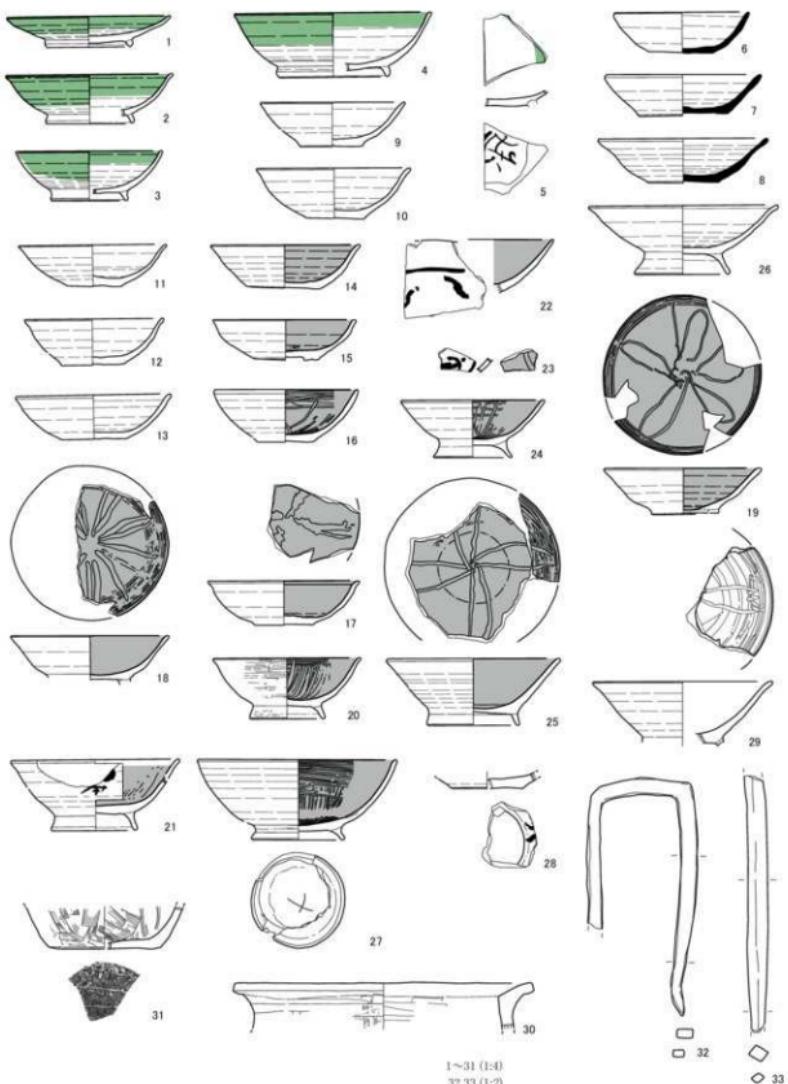
(3) H 4号住居址

本址は調査区北側のエ - 6 Grで検出された。住居西部分が一部検出された。形態は不明で、検出規模は南北長2.22m、東西長2.42mで、検出された住居床面積は2.65m²である。壁高さは西壁で0.36mを測る。ピットは1ヶ所検出され、規模はP1が径0.32m・深さ0.77mを測る。壁溝が巡り、深さ0.04~0.10mを測る。カマドと考えられる粘土の広がりが北壁側で検出されがれ火床部ではなく、カマドとしては確証が得られなかった。

遺物は覆土を中心に出土したが、3の土師器环は床面上から出土した。本址はこれらの出土遺物より9世紀前半に位置づけられると考える。



第6図 H 4号住居址及び出土遺物実測図



第7図 H 5号住居址出土遺物実測図

(4) H 5号住居址

本址は調査区北側のカ-11・12、キ-11・12Grで検出された。住居西部分が調査区域外となる。形態は方形と考えられ、検出規模は南北長5.42m、東西長3.90mで、検出された住居床面積は9.86m²である。主軸方位はN-72°-Eを示す。壁高さは東壁で0.22mを測る。カマドは東壁につくられ、礫と粘質土でつくられていた。火床部は煙道よりで確認され、焼土の厚みは0.07mであった。

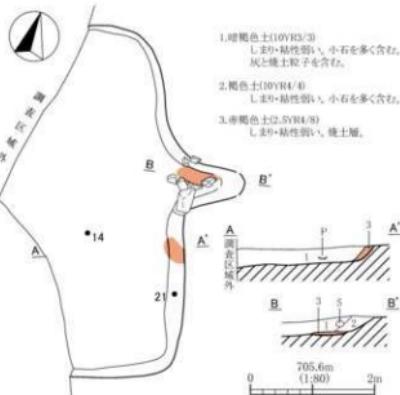
遺物は覆土を中心に多く出土した。1～5は灰釉皿と椀で、5には墨書が確認できる。6～8は須恵器壺、9～29までは土師器壺や碗である。内面黒色処理を施した壺・碗にはミガキによる暗文風の模様が描かれているものがある。30は土師器壺の口縁部破片であり、形態より甲斐型壺の可能性がある。

本址はこれらの出土遺物より、10世紀前半の所産時期が考えられる。

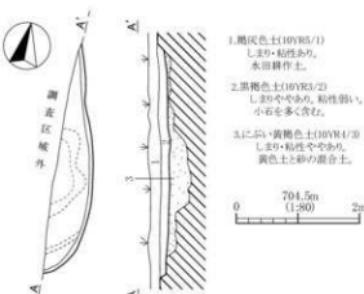
(5) H 6号住居址

本址は調査区南側のカ-19・20Grで検出された。住居西側の大部分が調査区域外となる。形態は不明であり、検出規模は南北長2.74m、東西長0.56mで、検出された住居床面積は1.34m²である。壁高さは東壁で0.17mを測る。床の顯著な硬質は確認できなかつたが、深い部分で0.31m貼られており、凹凸がある掘方であった。

遺物は灰釉陶器片、須恵器壺片、土師器壺片、弥生土器壺片が出土したが、いずれも小片で図示できるものはなかつた。よって本址の所産時期は不明である。



第8図 H 5号住居址実測図



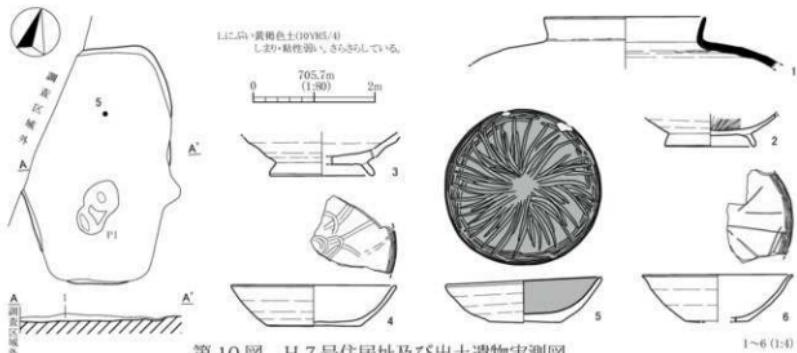
第9図 H 6号住居址実測図

(6) H 7号住居址

本址は調査区北側の工-7・8、オ-7・8Grで検出された。住居北西コーナーが調査区域外となる。形態は長方形であり、検出規模は南北長3.76m、東西長2.26mで、検出された住居床面積は7.07m²である。壁高さは0.01～0.08mを測る。床は顯著な硬質部分が確認できたが、掘方に関しては下層に重複構造の覆土が存在した為、確認できなかつた。ピットは1ヶ所検出され、規模はP1の長径0.94m、短径0.45m、深さ0.24mを測る。東壁が一部カマド煙道のように飛び出していたが、焼土や袖構築材等は検出されず、カマドとしては確認できなかつた。

遺物は覆土より出土が多かつた。1は須恵器短頸壺の口縁部である。2と3は土師器碗である。4～6は土師器壺でいずれも内面に暗文風のミガキが施されている。

本址の所産時期は出土遺物が少なく不確実であるが、9世紀代と考えられる。



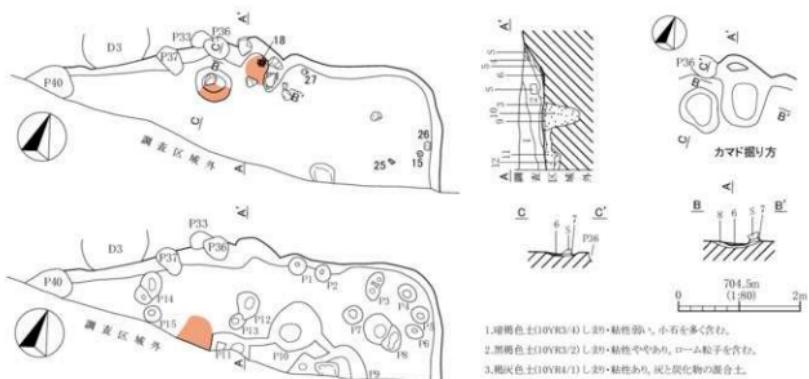
第10図 H7号住居址及び出土遺物実測図

(7) H 9号住居址

本址は調査区南側のエ-22、オ-22Grで検出された。住居南側が調査区域外となる。形態は方形と考えられ、検出規模は南北長 1.40 m、東西長 5.78 mで、検出された住居床面積は 8.26m²である。主軸方位は N-19°-W を示す。壁高さは東壁で 0.42 m を測る。床は頗著な硬質部分が確認でき、貼床は 0.02 ~ 0.20m の厚みで貼られていた。ピットは 15ヶ所検出され、いずれも掘方時に確認された。

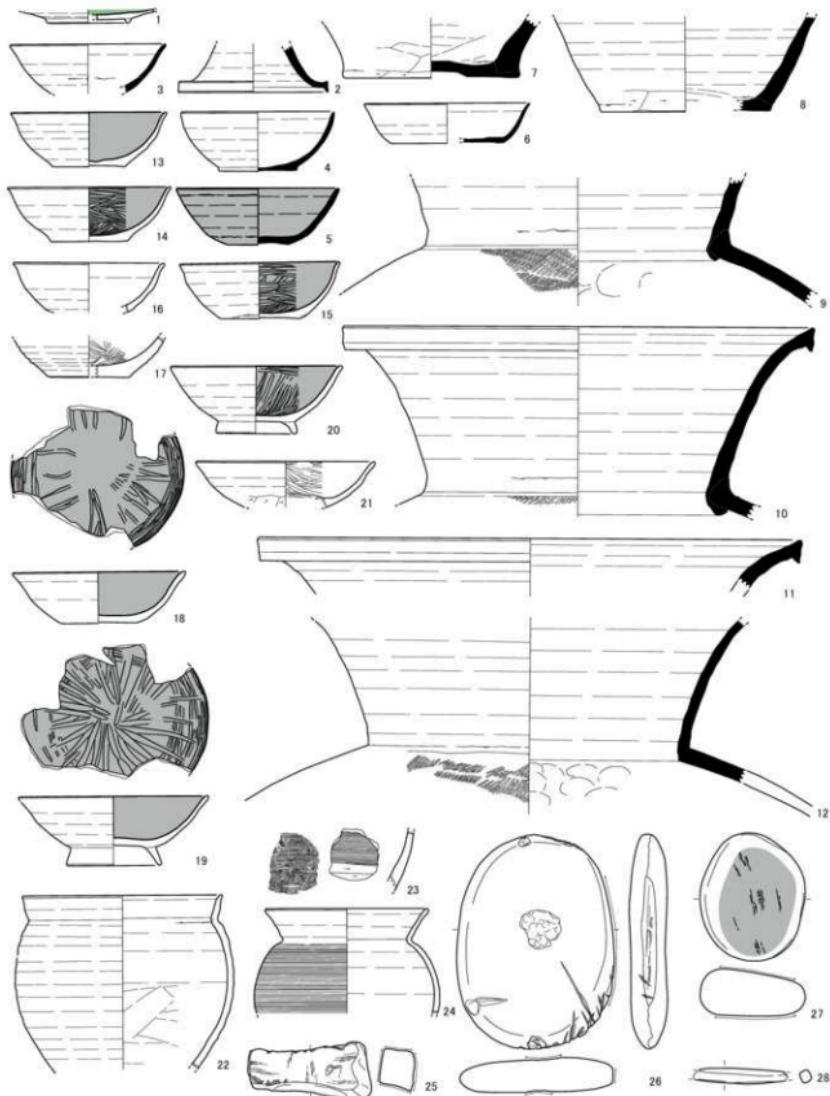
カマドは北壁中央に構築されており、礫と粘質土で袖をつくっていた。火床部はよく焼けており硬質化していた。

遺物は覆土からの出土が多く、28点を図示した。1は灰釉陶器皿で混入の可能性がある。2は須恵器高環脚部と長頸壺口縁部と判断に迷った。本址からは須恵器甕の出土が多く、9と10は同一個



- 5. 黒色土(10VR2/1)しり・粘性あり。燒土粒子を多く含む。
- 6. 非褐褐色土(2.5VR4/1)しり・弱く、粘性ややあり。燒土層、灰を含む。
- 7. 増褐色土(10VR3/4)しり・粘性あり。ロームブロックを含む。
- 8. 黒褐色土(10VR3/1)しり・粘性あり。
- 9. 黑色土(10VR2/1)しり・粘性あり。硬質化したブロック。
- 10. 非褐褐色土(10VR3/4)しり・粘性弱く、ぼそぼそしている。
- 11. 黑褐色土(10VR3/2)しり・粘性あり。ロームブロックと焼成物を含む。
- 12. 黑褐色土(10VR2/1)しり・粘性あり。燒土粒子とローム粒子を含む。

第11図 H9号住居址実測図

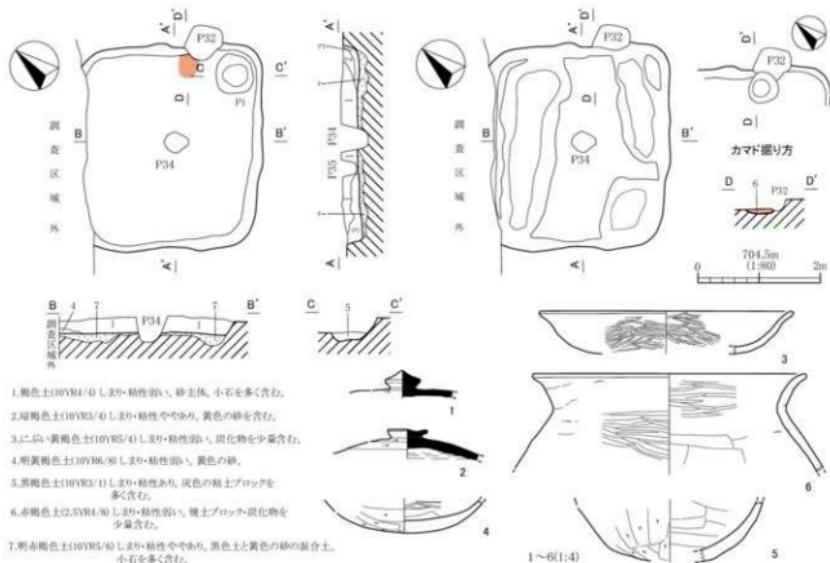


第12図 H9号住居址出土遺物実測図

1~27(1:4) 28(1:2)

体と考えられる。23 と 24 は小型のロクロ甕であり、外面に細かなカキ目状の成形痕が確認できる。形態や胎土から在地ではなく外来系土器と考えられる。

本址はこれらの出土遺物から所産時期が 9 世紀前半に位置づけられると考える。



第 13 図 H 10 住居址及び出土遺物実測図

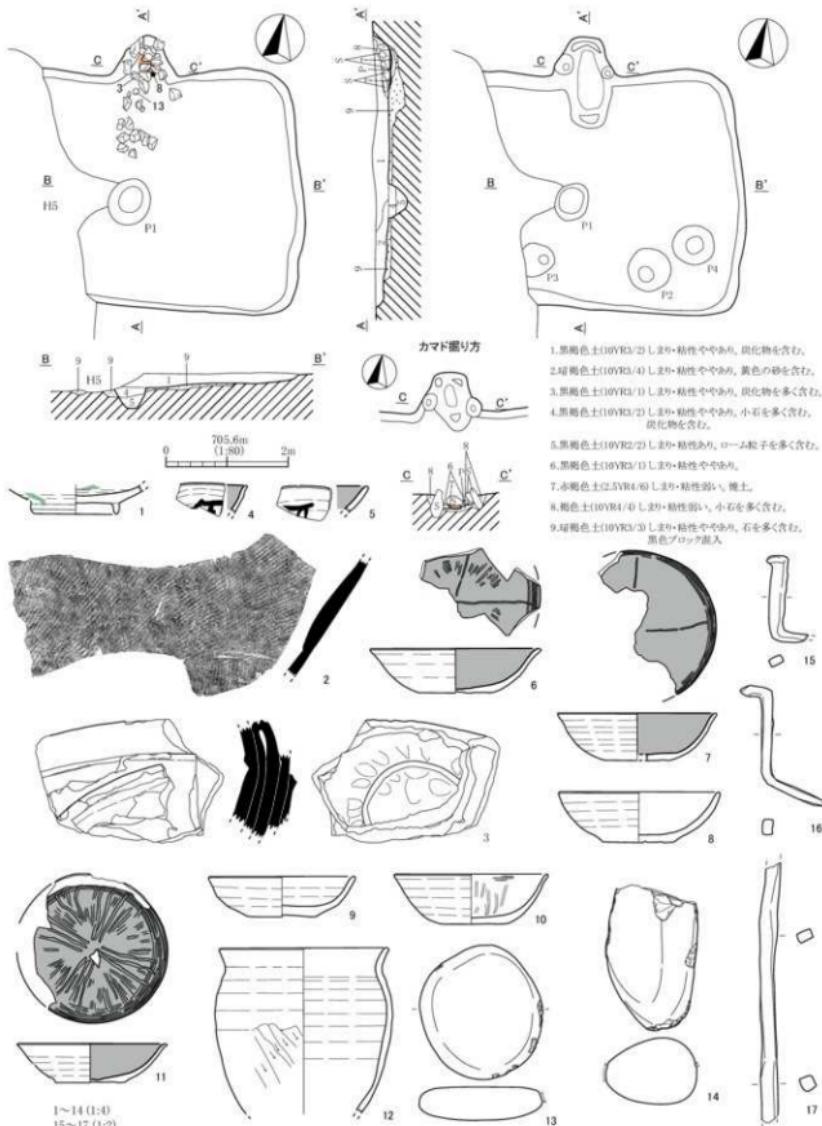
(8) H 10 号住居址

本址は調査区南側のオ -21、カ -21・22Gr で検出された。北壁の一部が調査区域外となる。形態は方形と考えられ、検出規模は南北長 3.02 m、東西長 2.70 m で、検出された住居床面積は 7.95m²である。主軸方位は N-51°-E を示す。壁高さは南西コーナーで 0.28 m を測る。床は顯著な硬質部分が確認でき、貼床は 0.07 ~ 0.21m の厚みで貼られていた。ピットは 1 ケ所検出され、規模は径 0.64m、深さ 0.10m を測る。掘方は中央部が一段高く北壁と南壁が一段低い掘方であった。カマドは東壁中央南よりに構築されており、火床部のみが確認できた。焼土の規模は径 0.36m、厚み 0.06m である。

遺物は覆土からの出土が多く、6 点を図示した。1 と 2 は須恵器蓋である。3 は土師器高坏の坏部と考えられる。4 ~ 6 は土師器甕である。出土遺物が少なく不確実であるが、これらの遺物から本址は 7 世紀後半から 8 世紀代の所産時期が考えられる。

(9) H 11 号住居址

本址は調査区北側のオ -11・12、カ -11・12Gr で検出された。西側が H5 号住居址に壊されている。形態は方形と考えられ、検出規模は南北長 3.58 m、東西長 3.78 m で、検出された住居床面積は 12.48m² である。主軸方位は N-10°-W を示す。壁高さはカマド脇で 0.16 m を測る。床は顯著な硬質部分が確認でき、貼床は 0.03 ~ 0.14m の厚みで貼られていた。ピットは 4 ケ所検出されたがいずれも主柱穴とは考えられなかった。



第14図 H 11 住居址及び出土遺物実測図

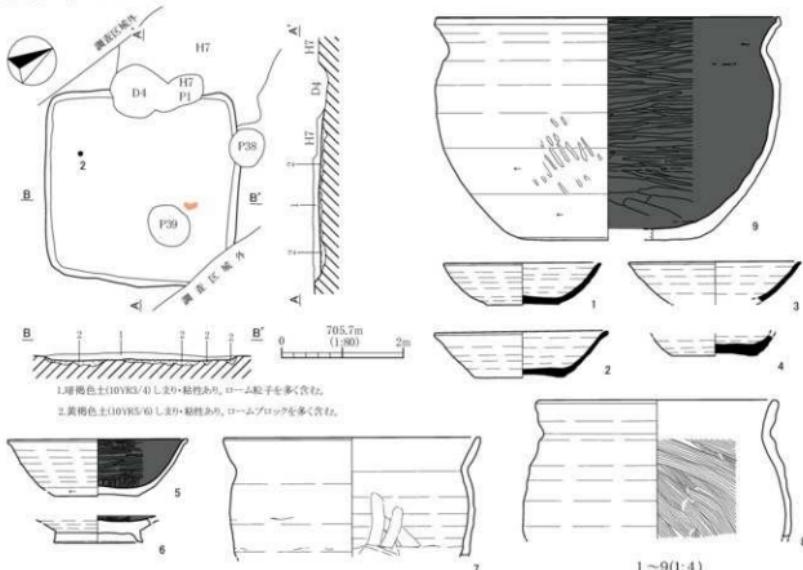
カマドは北壁中央で検出された。カマドから掻きだされたような状態で大量の礫が確認された。この礫下からは、径 0.3m ほどの火床部が確認された。また、一部袖石も原位置を保つ状態で発見された。

本址からはカマド周辺や覆土から遺物が多く出土し、17 点を図示した。特に 3 の須恵器甕は口縁部の破片に別個体の甕口縁部破片が溶けて付着しており、須恵器窯から消費遺跡まで持ち込まれたと考えられる。本址はこれらの遺物から 9 世紀後半の所産時期が考えられる。

(10) H 12 号住居址

本址は調査区北側のエ -7・8、オ -7・8Gr で検出された。形態は方形と考えられ、検出規模は南北長 2.62 m、東西長 2.94 m で、検出された住居床面積は 8.45m²である。主軸方位は不確実であるが N-60°-W を示す。壁高さは西コーナーで 0.09 m を測る。床は一部分で硬質が確認でき、貼床は 0.01 ~ 0.09 m の厚みで貼られていた。ピットは検出されなかった。カマドは D4 号土坑に削平されたと考えられる。

本址からは覆土を中心に遺物が出土し、9 点を図示した。特に 9 は内面を丁寧なミガキと黒色処理を施した土師器鉢で、外面は叩き技法の痕跡が残る。本址はこれらの出土遺物から 9 世紀後半の所産時期が考えられる。



第 15 図 H 12 住居址及び出土遺物実測図

(11) H 13 号住居址

本址は調査区南側のカ -21・22、キ -21・22Gr で検出された。形態は方形で、規模は南北長 3.42 m、東西長 3.30 m で、住居床面積は 11.65m²である。主軸方位は N-27°-W を示す。壁高さはカマド脇で 0.38 m を測る。床はカマド前面で硬質が確認でき、貼床は 0.07 ~ 0.21m の厚みで貼られていた。ピットは 1 ケ所確認され、規模は径 0.31m、深さ 0.36m であった。カマドは北壁中央部に構築されており、袖部分と火床部が検出された。火床部はよく焼けており、0.04m の焼土堆積が確認された。

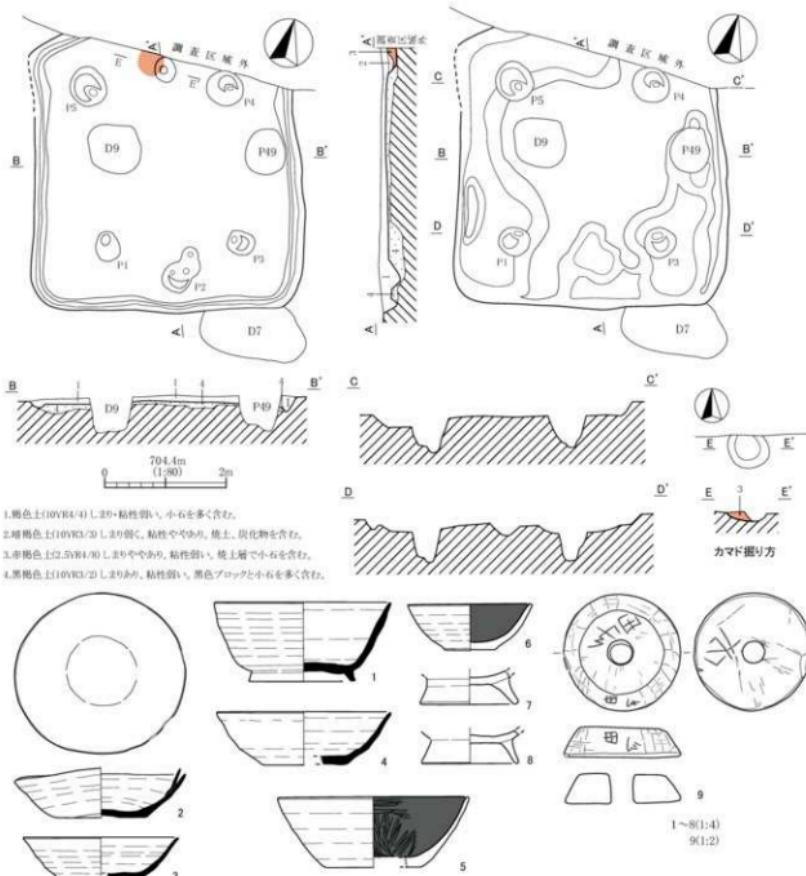


第16図 H 13住居址及び出土遺物実測図

本址からの出土遺物は多く、18点を図示した。1と2は須恵器壺蓋である。3～8は須恵器壺である。9は須恵器甕であり、10は肩胴部に凸帯が巡る、いわゆる「四耳壺」の破片と考えられる。土師器は壺と甕があり、壺は内面黒色処理を施したものがあった。17の土師器甕はいわゆる「武藏甕」と呼ばれるもので胴部下半を欠損する。また18は大型の刀子と考えられ、柄部には木質が鋳化して残存していた。本址はこれらの出土遺物から8世紀後半の所産時期が考えられる。

(12) H 14 号住居址

本址は調査区南側のケ-21・22、ケ-21・22Grで検出された。形態は方形で、規模は南北長4.22m、東西長3.92mで、住居床面積は15.33m²である。主軸方位はN-14°-Wを示す。壁高さは東壁中央で0.16mを測る。床は中央部分が硬質で、貼床は0.12~0.30mの厚みで貼られていた。掘方は東壁際と西壁際が一段低く掘り込まれていた。壁溝は幅0.10~0.18m、深さ0.03~0.11mで、検出された壁際に一周するように巡っていた。ピットは5ヶ所確認され、P1とP3~P5は主柱穴、P2は入口施設のピットと考えられる。カマドは検出されなかったが、北壁際に良く焼けた焼土範囲が検出され、カマド火床部と考えられる。焼土は径0.42m、深さ0.16mであった。



第17図 H14号住居址及び出土遺物実測図

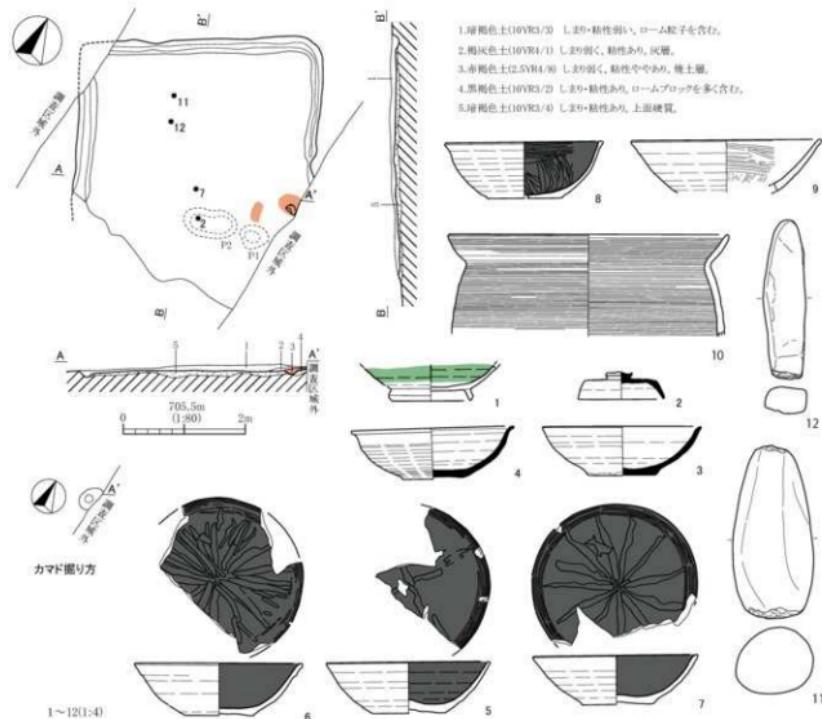
本址からの出土遺物は比較的多く、9点を図示した。2は須恵器坏で、歪みが激しくいわゆる「杓状坏」と呼ばれるものである。注目される出土遺物としては9の石製紡錘車がある。ほぼ完形で、下面と側面に「○田」と考えられる刻書、上面に刻線がそれぞれ確認できる。

本址の所産時期は6~8を混入遺物と考えると、8世紀代と考えられる。

(13) H 15号住居址

本址は調査区北側のエ-8・9、オ-8・9Grで検出された。南側は地形により削平されていた。形態は不明で、検出規模は南北長4.18m、東西長3.52mで、住居床面積は11.84m²である。主軸方位はN-66°-Eを示す。壁高さは東壁中央で0.06mを測る。床は中央部分が硬質で、貼床は0.02~0.11mの厚みで貼られていた。壁溝は幅0.13~0.22m、深さ0.03~0.07mで、検出された壁際一周するように巡っていた。ピットは掘方時に2ヶ所確認された。カマドは検出されなかったが、東壁際に焼土範囲が検出され、カマド火床部と考えられる。焼土は径0.32m、深さ0.07mであった。

本址からの出土遺物は12点を図示した。平面図に記載した4点の遺物はいずれも床面上の遺物であった。これらの遺物より本址は9世紀代に位置づけられると考える。

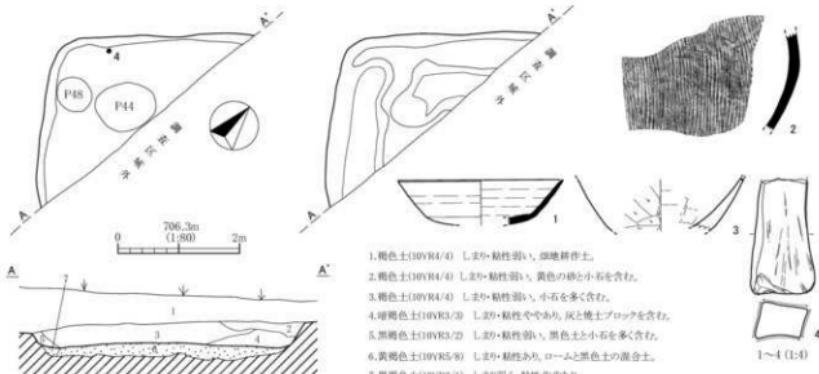


第18図 H15号住居址及び出土遺物実測図

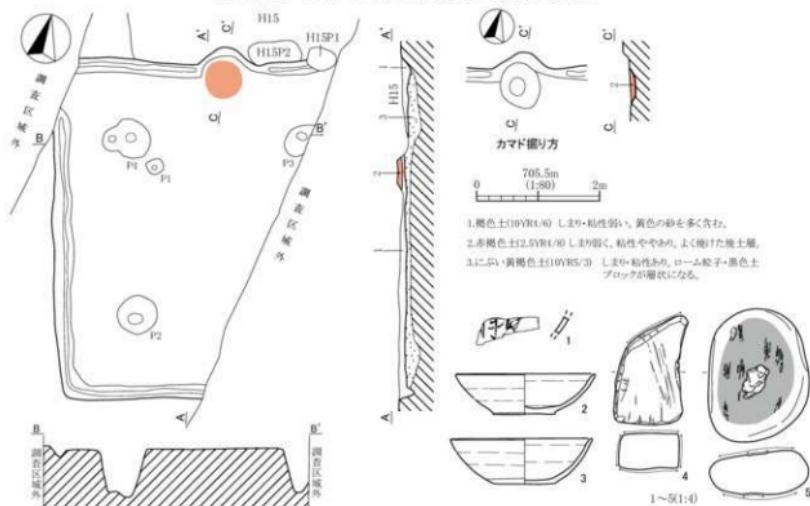
(14) H 17 号住居址

本址は調査区北側のオ -11・12Grで検出された。住居北西コーナー部のみの検出である。検出規模は南北長 2.24 m、東西長 2.60 mで、検出部の床面積は 4.05m²である。壁高さは北壁で 0.37 m を測る。貼床は 0.10 ~ 0.21 m の厚みで貼られていた。

本址からの出土遺物は少なく 4 点を図示した。これら遺物より不確実であるが、本址は 8 世紀代に位置づけられると考える。



第 19 図 H17 号住居址及び出土遺物実測図



第 20 図 H18 号住居址及び出土遺物実測図

(15) H 18号住居址

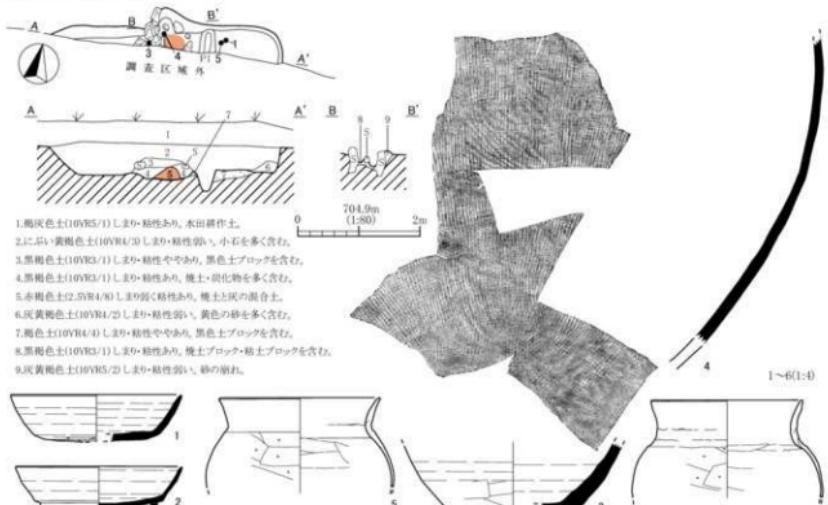
本址は調査区北側のエ-9・10、オ-9・10・11Grで検出された。形態は方形で、規模は南北長4.96m、東西長>4.16mで、検出部分の床面積は16.28m²である。主軸方位はN-15°-Wを示す。壁高さは南壁で0.15mを測る。床は中央部分が硬質で、貼床は0.06~0.12mの厚みで貼られていた。壁溝は幅0.12~0.22m、深さ0.05~0.09mで、検出された壁際に一周するように巡っていた。ピットは4ヶ所確認され、P2~P4は主柱穴と考えられる。カマドは北壁中央で検出されたが、袖部分は確認されず、火床部のみ検出された。

本址からの出土遺物は少なく5点を図示した。いずれも覆土からの出土である。1は土師器壺の体部であり、墨書が確認できるが判読は不明である。本址の所産時期は不明である。

(16) H 19号住居址

本址は調査区南側のキ-22・23、ク-22・23Grで検出された。形態は不明で、カマド周辺部のみ検出された。検出規模は南北長0.24m、東西長3.12mで、検出部分の床面積は0.86m²である。主軸方位はN-13°-Wを示す。壁高さは北壁で0.37mを測る。貼床は0.16mの厚みで貼られていた。ピットは1ヶ所確認された。カマドは北壁中央で検出された。袖部分は礫と粘質土で構築されており、火床部はよく焼けていた。

本址からの出土遺物はカマド周辺より多く出土し、6点を図示した。1と2は須恵器壺。4と3は須恵器甕である。5と6は小型の土師器甕である。これらの出土遺物より、本址は8世紀代の所産時期と考えられる。



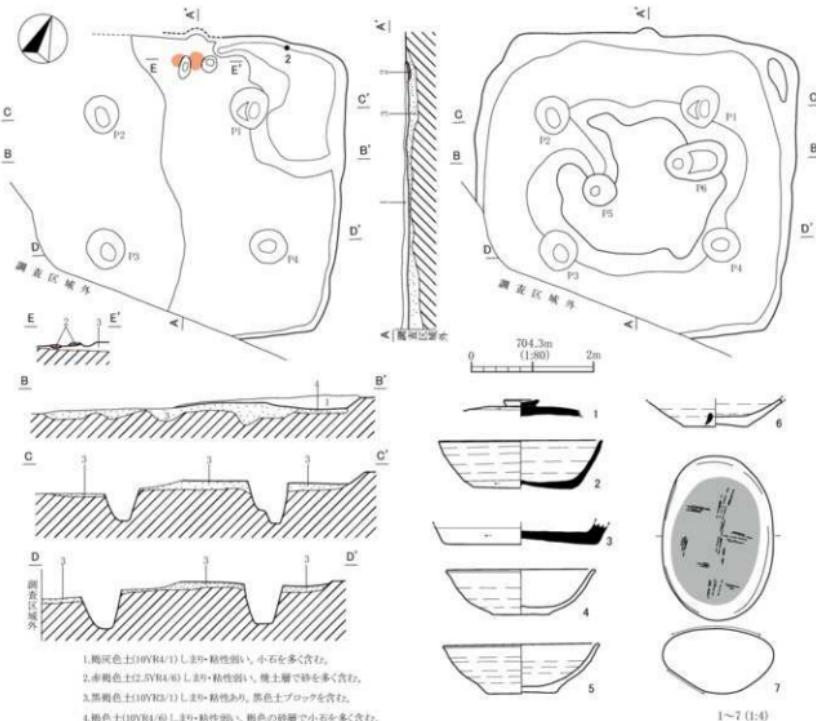
第21図 H19号住居址及び出土遺物実測図

(17) H 21号住居址

本址は調査区西側のゾ-21・22・23、タ-22・23Grで検出された。形態は方形で、検出規模は南北長4.76m、東西長4.84mで、検出部分の床面積は19.07m²である。主軸方位はN-20°-Wを示す。壁高さは北東コーナーで0.15mを測る。床はやや軟質であったが、貼床は0.01~0.16mの厚みで

貼られていた。ピットは6ヶ所確認され、P1～P4が主柱穴と考えられる。カマドは北壁中央で確認されたが、火床部と袖構築材の掘り込み穴が確認されたのみである。

本址からの出土遺物は少なく、7点を図示したのみである。これらの出土遺物より不確実ではあるが、本址は8世紀代の所産時期が考えられる。

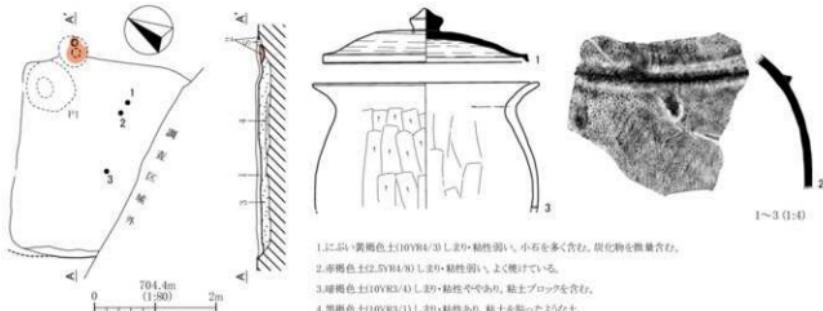


第22図 H21号住居址及び出土遺物実測図

(18) H 22号住居址

本址は調査区西側のセ-22・23Grで検出された。形態は不明で、カマド周辺部と一部硬質の床が検出された。検出規模は南北長3.12m、東西長2.70mで、検出部分の床面積は6.46m²である。主軸方位はN-65°-Eを示す。壁高さは西壁で0.10mを測る。貼床は0.10～0.20mの厚みで貼られていた。ピットは掘方時に1ヶ所確認された。規模は径0.82m、深さ0.47mである。カマドは東壁北よりで検出された。火床部分のみの検出であったが、よく焼けていた。

本址からの遺物は覆土より出土し、3点を図示した。1は須恵器壺蓋であり、ほぼ完形である。2は須恵器壺であり、肩部に1条の凸帯を巡らしている。いわゆる「四耳壺」と呼ばれる器種と考えられる。3は土師器壺である。これらの出土遺物より不確実ではあるが、本址は8世紀代の所産時期と考えられる。



第23図 H22号住居址及び出土遺物実測図

(19) H 3号住居址

本址は調査区北側のウ-4・5、エ-4・5Grで検出された。形態は長方形で、検出規模は南北長4.18m、東西長2.74mで、検出部分の床面積は9.57m²である。主軸方位はN-7°-Wを示す。壁高さは北壁で0.11mを測る。ピットは1ヶ所確認された。規模は径0.26m、深さ0.28mである。炉は住居址北より中央で検出された。炉は中央部に土器を敷き詰めた、いわゆる「土器埋設炉」であり、掘方は長軸1.16m、幅0.44m、深さ0.13mを測る。埋設された土器内に顯著な焼土は確認できなかった。

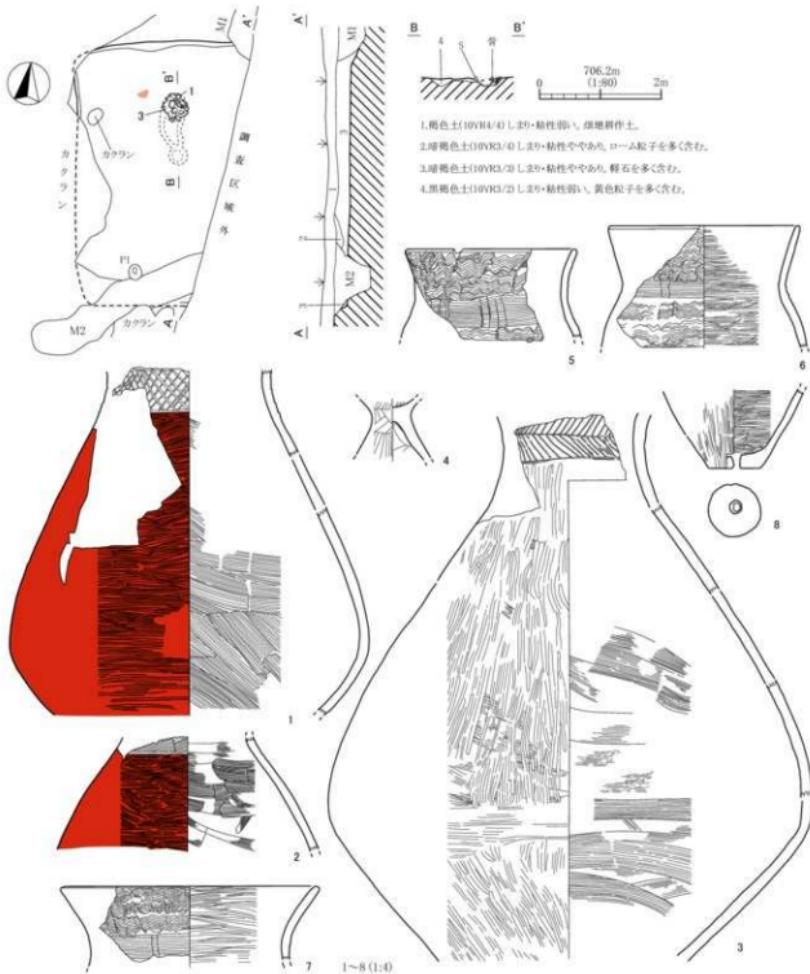
本址からの遺物は覆土や炉周辺より出土し、8点を図示した。1～3は壺であり、1と3が炉に使われていた土器である。これら壺の頸部文様帶はいずれも異なっていた。4は台付甕の脚部と考えられる。5～7は甕で、いずれも櫛描波状文と頸部に櫛描簾状文が施されている。8は単孔の甕である。これらの出土遺物より、本址は弥生後期の箱清水式期に位置づけられる。

(20) H 8号住居址

本址は調査区北側のエ-5・6・7、オ-5・6・7Grで検出された。形態は隅丸長方形で、西側の半分以上は調査区域外となる。検出規模は南北長8.46m、東西長3.66mで、検出部分の床面積は20.97m²である。主軸方位はN-12°-Wを示す。壁高さは東壁で0.30mを測る。床は全体に硬質で、貼床は0.01～0.06mの厚みで貼られていた。また、壁下の一部には壁溝が巡っており、規模は幅0.14～0.18m、深さ0.02～0.08mを測る。ピットは11ヶ所が確認された。P1とP11は検出位置より主柱穴と考えられ、本址は6本の主柱穴の可能性がある。P4～P7は入口施設と考えられる。P3は貯蔵穴で住居側の床上に土手状の土盛りが検出された。P8～P10は壁柱穴で、それぞれ主柱穴に対応した位置に検出された。

本址からの出土遺物は非常に多く、第28図に示したように住居址中央部にまとまった状態で出土した。出土状態は住居中央に近いほど床面に近く、西壁際近くなるに従い床と出土遺物の間に黒色土の堆積が確認された為、これら遺物は住居廃絶後しばらく時間が経過した後に住居内に破棄された遺物群と考えられる。

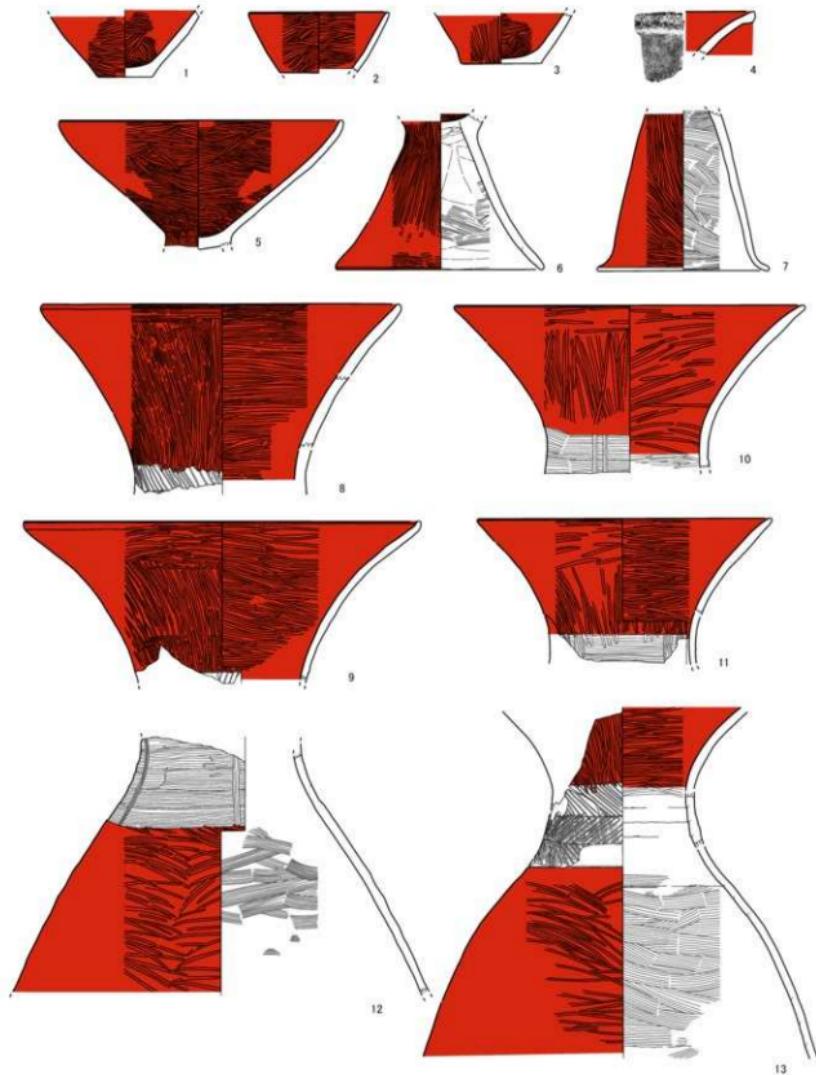
出土遺物は62点を図示した。1～3は鉢でいずれも赤彩が施されている。4～7は高環であり、4は环部の口唇部に櫛描斜走文が施されている。8～24は壺である。いずれも頸部に文様帶をもち赤彩が施されている。頸部文様帶の内、15～17は篦描沈線の区画内に細い棒状工具による円形刺突が施されており、15・16・18は区画が鋸歯文を呈する。25は鉢と考えられるが、壺の欠損部をミガキ、擬似口縁状につくりだしている。26～47は甕である。文様は櫛描波状文、櫛描斜走文が主体で、頸部に櫛描簾状文を施す。特殊なものとして、35と45～47は地文が繩文施文となる。41は櫛描簾状文を刺突状に施文した文様である。48はミニチュア土器と考えられる。49は無頸壺



第24図 H3号住居址及び出土遺物実測図

と考えられる。やや黒味をおび黑色処理のような状態である。50～61は石製品で、敲き或いは磨りが観察できる。62は上下は欠損しているが4面が擦れた砥石と考えられる。

これらの出土遺物から、本址は弥生後期の箱清水期に位置づけられると考える。

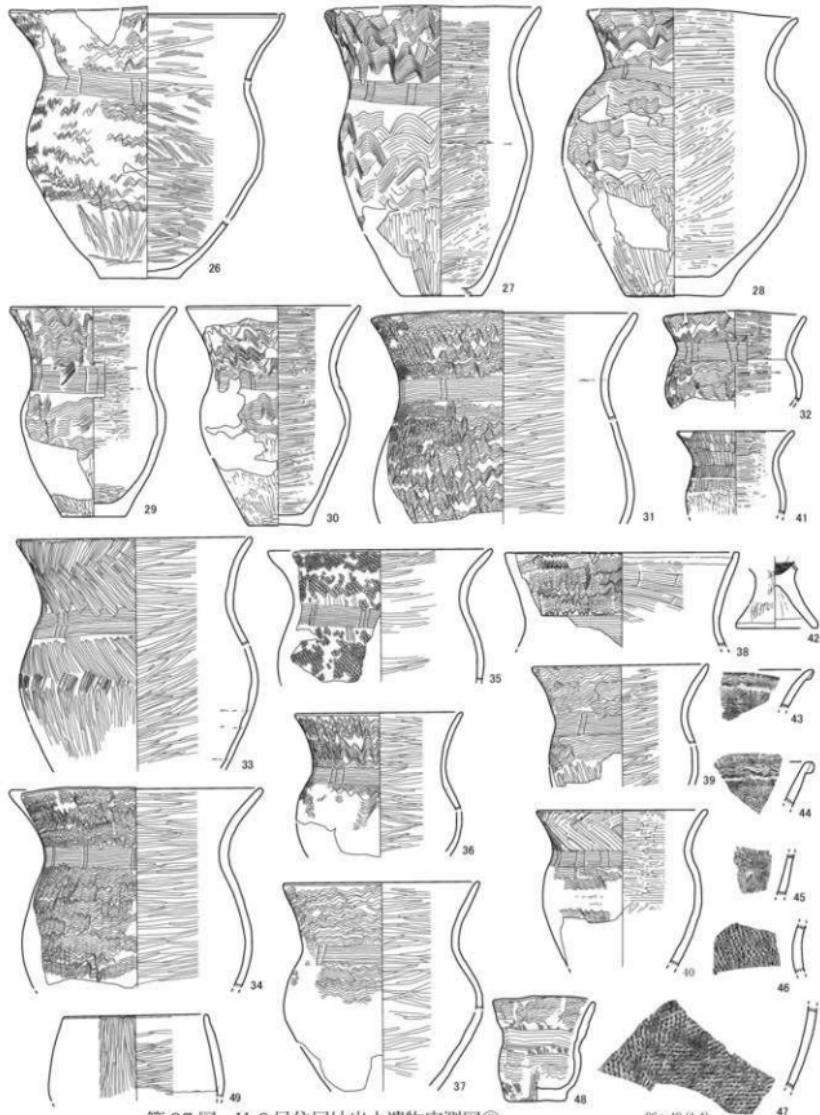


第 25 図 H 8 号住居址出土遺物実測図①

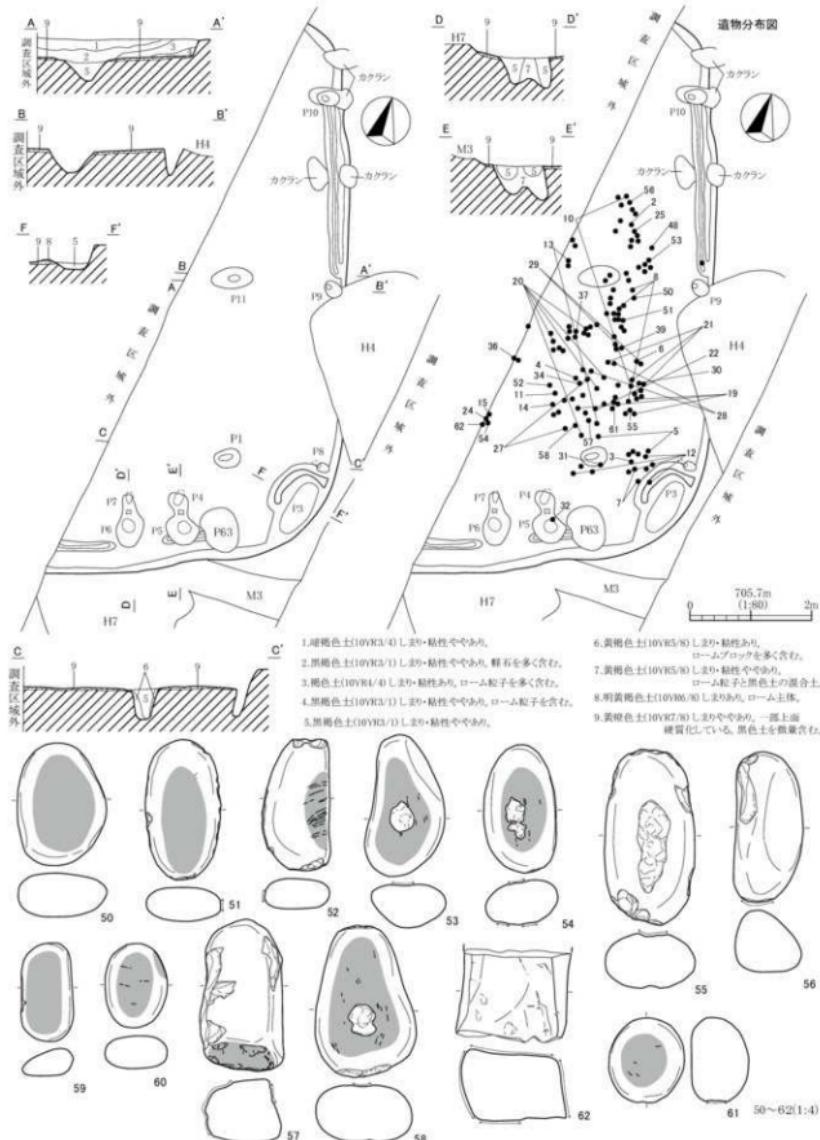
1~13 (1:4)



第26図 H8号住居址出土遺物実測図②



第27図 H 8号住居址出土遺物実測図③

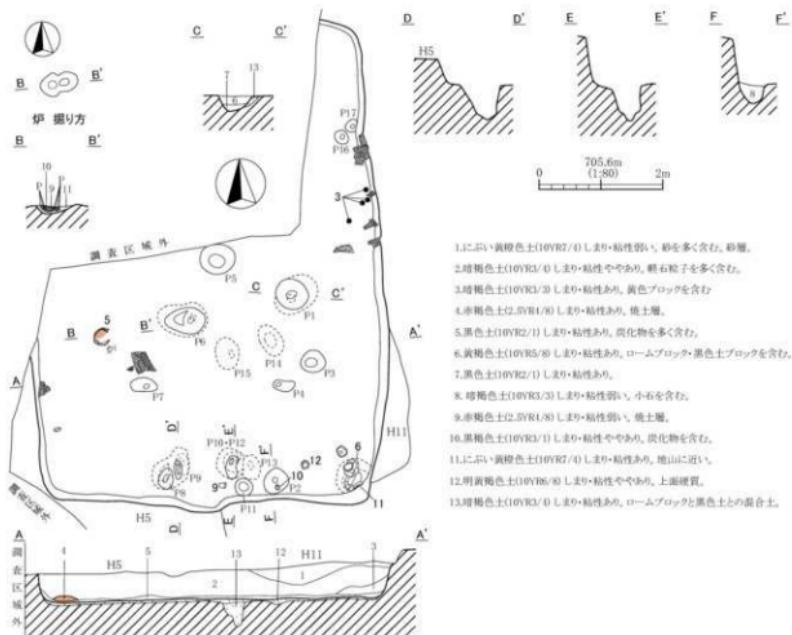


(21) H 16 号住居址

本址は調査区北側のオ-10・11・12、カ-10・11・12、キ-11・12Grで検出された。形態は長方形で、北西側の1/3は調査区域外となる。検出規模は南北長7.56m、東西長5.50mで、検出部分の床面積は24.28m²である。主軸方位はNを示す。壁高さは南東コーナーで0.76mを測る。床は全体に硬質で、貼床は0.02~0.04mの厚みで貼られていた。また、床面上からは多量の炭化材が出土し、本址が焼失家屋の可能性を示していた。ピットは17ヶ所確認された。P8~P10、P12・P13は入口施設と考えられる。P1とP6及びP14とP15は入口施設と主柱穴のような位置関係に検出され、或いは本址の内側に重複する住居址がもう一軒存在した可能性がある。炉は西壁よりで検出された。いわゆる「土器埋設炉」であり、図示した5が据え置かれていた。

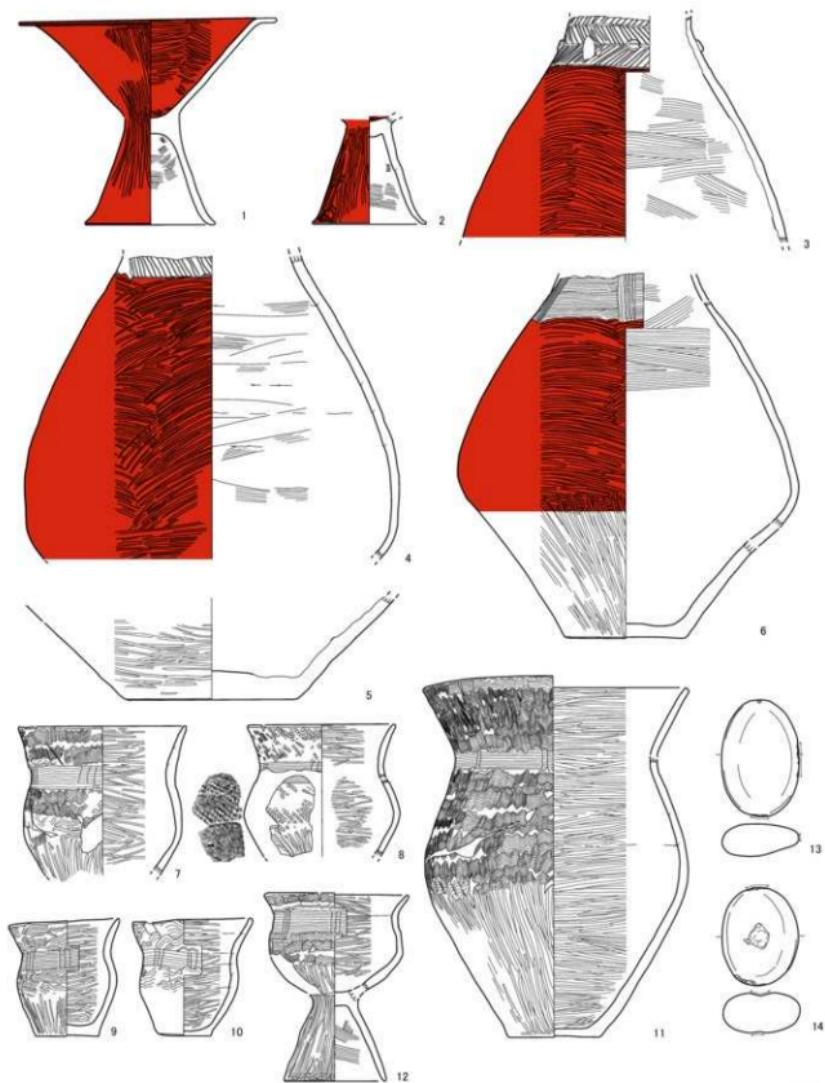
本址からの出土遺物は非常に多く、特に南壁の入口付近からまとめて出土した。出土遺物は14点を図示した。1と2は高杯である。いずれも赤彩が施されている。3~6は壺である。頸部に櫛描横線文、籠描斜線文がそれぞれ施されている。7~11は甕である。9と10は小型でミニチュア土器として捉えた方がよいかかもしれない。8は地文に縄文施文を行い、頸部に櫛描簾状文を施している。その他のものは地文に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文が施されている。12は台付甕であり、地文に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文が施されている。13と14は敲き石である。

本址はこれらの出土遺物から、弥生時代後期の箱清水期に比定されると考えられる。



第29図 H16号住居址実測図

- 1.に5m 黄褐色土(10YR7/4)しまり・粘性弱い、砂を多く含む。砂層。
- 2.暗褐色土(10YR3/0)しまり・粘性ややあり。鉛石粒子を多く含む。
- 3.暗褐色土(10YR1/3)しまり・粘性弱い、黄色ブロックを含む。
- 4.赤褐色土(2.5YR4/8)しまり・粘性あり。桃土層。
- 5.黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。腐物を多く含む。
- 6.黄褐色土(10YR5/8)しまり・粘性あり。ロームブロック・黒色土ブロックを含む。
- 7.黑色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。
- 8.暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性弱い。小石を含む。
- 9.赤褐色土(2.5YR1/8)しまり・粘性弱い。桃土層。
- 10.暗褐色土(10YR1/1)しまり・粘性ややあり。炭化物を含む。
- 11.に5m 黄褐色土(10YR7/4)しまり・粘性あり。地山に近い。
- 12.明褐色土(10YR6/8)しまり・粘性ややあり。上面硬質。
- 13.暗褐色土(10YR3/0)しまり・粘性あり。ロームブロックと黒色土との混合土。



第30図 H16号住居址出土遺物実測図

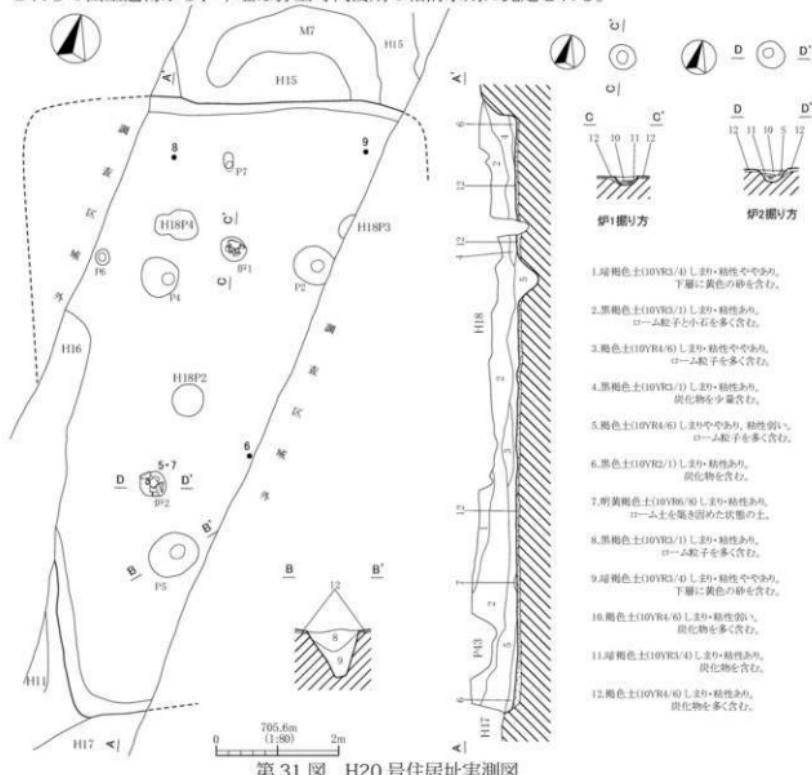
1~14 (1:4)

(22) H 20 号住居址

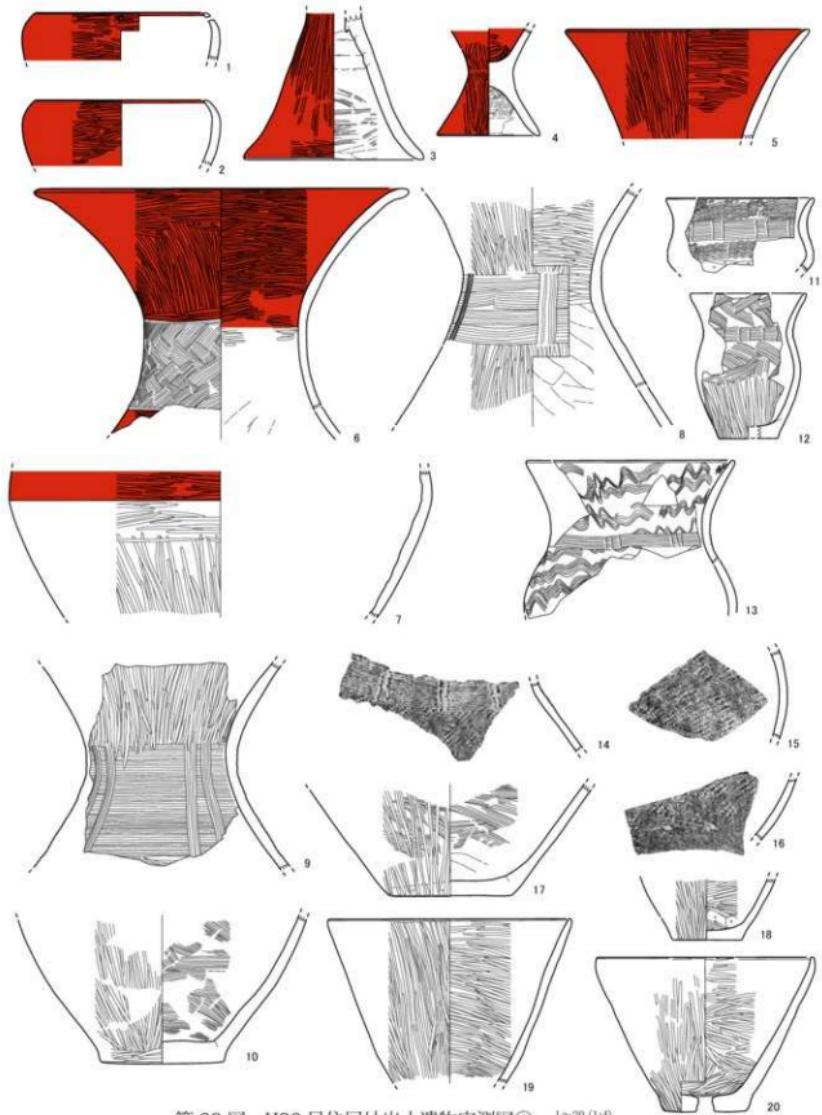
本址は調査区北側のエ・9・10・11、オ・9・10・11Grで検出された。形態は隅丸長方形で、西側と東側が調査区域外となるため、住居中央部のみの検出となった。検出規模は南北長8.16m、東西長4.16mで、検出部分の床面積は29.39m²である。主軸方位はN-17°-Wを示す。壁高さは北壁で0.57mを測る。床は全体に硬質で、一部に張替が確認された。貼床は0.02~0.08mの厚みで貼られていた。ピットは5ヶ所が確認された。P2・P4・P5は検出位置より主柱穴と考えられ、P7は棟持柱と考えられる。炉は2ヶ所に検出された。いずれも「土器埋設炉」の形態である。規模は炉1が径0.42m、深さ0.12m、炉2が径0.44m、深さ0.18mを測る。顯著な焼土は確認されなかった。

出土遺物は26点を図示した。覆土や床面上より出土した。1と2は鉢でいずれも赤彩が施されている。3と4は高環である。5~10は壺であり、8と9は無彩である。11~18は甕である。11は形態より台付甕の可能性がある。16~18は地文に縄文を施文する。20は単孔の甕であり、19も形態より甕と考えられる。21は敲き石、22・23は磨り石である。24は土製の勾玉である。25と26は縄文後期の土器片である。

これらの出土遺物から、本址は弥生時代後期の箱清水期に比定される。



第31図 H 20号住居址実測図



第32図 H20号住居址出土遺物実測図①

1~20 (1:0)



第32図 H20号住居址出土遺物実測図②

2. 土坑

今回の調査では13基の土坑を調査した。いずれも形態が整うものは無かったが、D2号土坑は覆土の状況や、土坑底面から湧水があり井戸枠片と考えられる木片等が出土したことから、井戸址の可能性がある。また、所産時期も周辺部の調査成果と同じく中世と考えられる。また、D10号土坑とD14号土坑は形態的に似ており同一性格の遺構と考えられる。なお、表に記載した出土遺物はいずれも小片であり、図化することはできなかった。図化したものはD1号土坑の金属製品、D11の土師器環のみであった。

第1表 土坑計測表

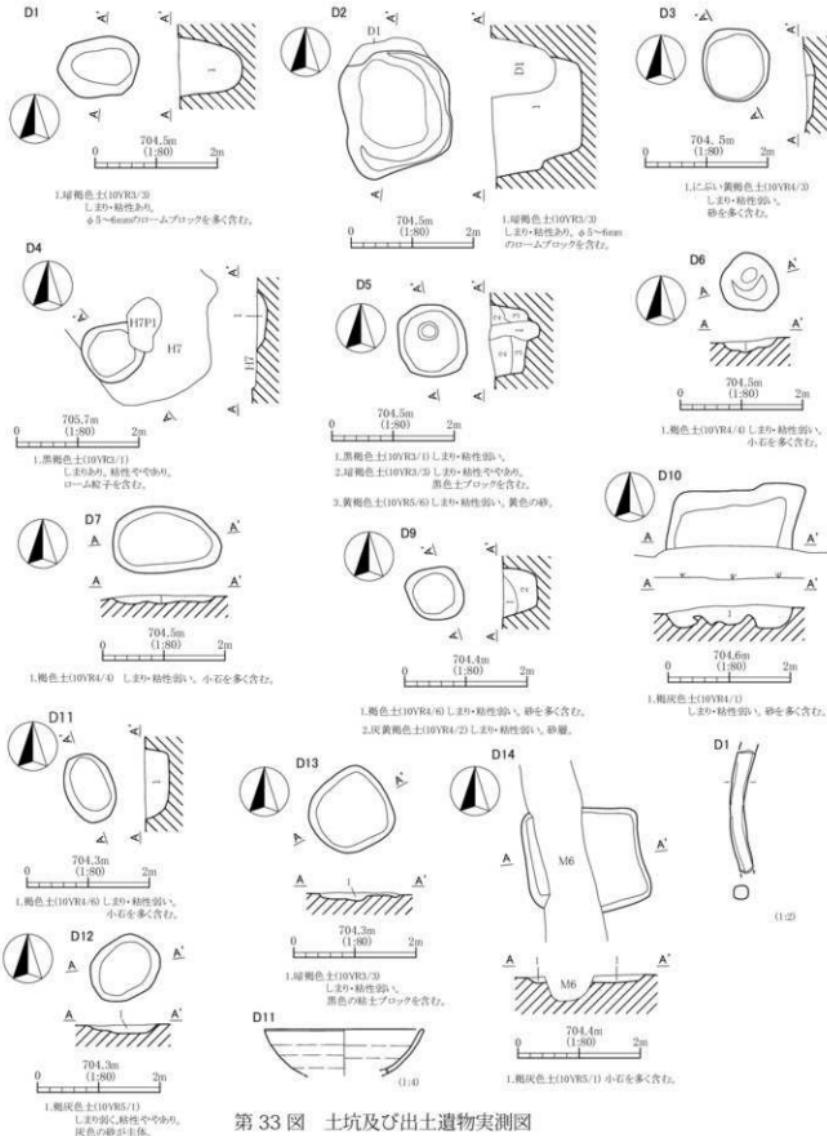
遺構名	形態	検出位置	長軸長	短軸長	深さ	出土遺物	単位(m)	< > 検出値	備考
D1	楕円形	オ・カ-17	1.34	0.94	1.06	須恵器壺・甕 土師器壺			
D2	楕円形	オ・カ-17	<1.88>	1.78	1.49	弥生壺 木片			中世
D3	円形	オ・カ-22	1.24	1.08	0.15	須恵器壺・甕			
D4	不整形	オ-7	<0.82>	0.90	0.15	須恵器壺			
D5	円形	キ-21+22	1.20	1.10	0.57	弥生壺			柱痕
D6	円形	キ-22	0.96	0.90	0.37				
D7	不整形	ク-22	1.78	1.10	0.14				
D9	円形	ク・ケ-22	0.92	0.86	0.54	須恵器壺・甕 土師器甕 弥生壺			
D10	方形?	シ-22+23	2.10	<0.86>	0.29	須恵器甕 土師器壺・甕(武藏型)			
D11	楕円形	シ-22	1.10	0.78	0.44	須恵器壺 土師器甕(ロクロ)			
D12	円形	ス-22	1.18	0.98	0.14	須恵器壺 土師器甕(ロクロ)			
D13	方形	ス・セ-21	1.32	1.26	0.13	須恵器壺 土師器壺・甕 弥生壺			
D14	方形	ケ-22	1.88	1.72	0.12				

3. 溝状遺構

(1) M 1号溝状遺構

本址は調査区北端ウ-3Grで検出された。断面形状はU字形で、検出長4.15mである。規模は幅0.50~0.56m、深さ0.30~0.45mである。溝は南北方向に延び、検出部の中央が一段窪んでいた。

本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。



第33図 土坑及び出土遺物実測図

(2) M 2 号溝状遺構

本址は調査区北、ウ -4 、エ -4・5Gr で検出された。溝断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。検出長は 2.95m 、幅 0.54 ~ 0.88m 、深さ 0.22 ~ 0.48m である。西側は地形の傾斜により検出できなかった。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(3) M 3 号溝状遺構

本址は調査区北、エ・オ -7Gr で検出された。溝断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。検出長は 2.44m 、幅 0.54 ~ 0.68m 、深さ 0.06 ~ 0.16m である。西側は地形の傾斜により検出できなかった。本址からの出土遺物は灰釉陶器皿片、須恵器甕片、内面黒色処理された土師器坏片が出土したがいずれも小片で図化できなかった。所産時期も不明である。

(4) M 4 号溝状遺構

本址は調査区北、オ -8Gr で検出された。溝断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。覆土は砂が多く混入していた。検出長は 1.37m 、幅 0.80 ~ 0.84m 、深さ 0.08 ~ 0.09m である。南側は H15 号住居址で切られる。本址からの出土遺物は弥生土器片が多数出土した。遺構の新旧関係より古代以前の所産時期が考えられる。

(5) M 5 号溝状遺構

本址は調査区北、オ -11Gr で検出された。溝断面形状は V 字形であった。検出長は 2.42m 、幅 0.32 ~ 0.54m 、深さ 0.10 ~ 0.34m である。西側は地形の傾斜により検出できなかった。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(6) M6 号溝状遺構

本址は調査区南、ケ -21・22・23Gr で検出された。溝断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。検出長は 4.95m 、幅 0.84 ~ 1.02m 、深さ 0.36 ~ 0.39m である。調査区を横断するように、南北方向に延びると考えられる。本址からの出土遺物は灰釉陶器皿片、須恵器坏・甕片、内面黒色処理された土師器坏片等があった。本址の所産時期は不確実であるが古代と考えられる。

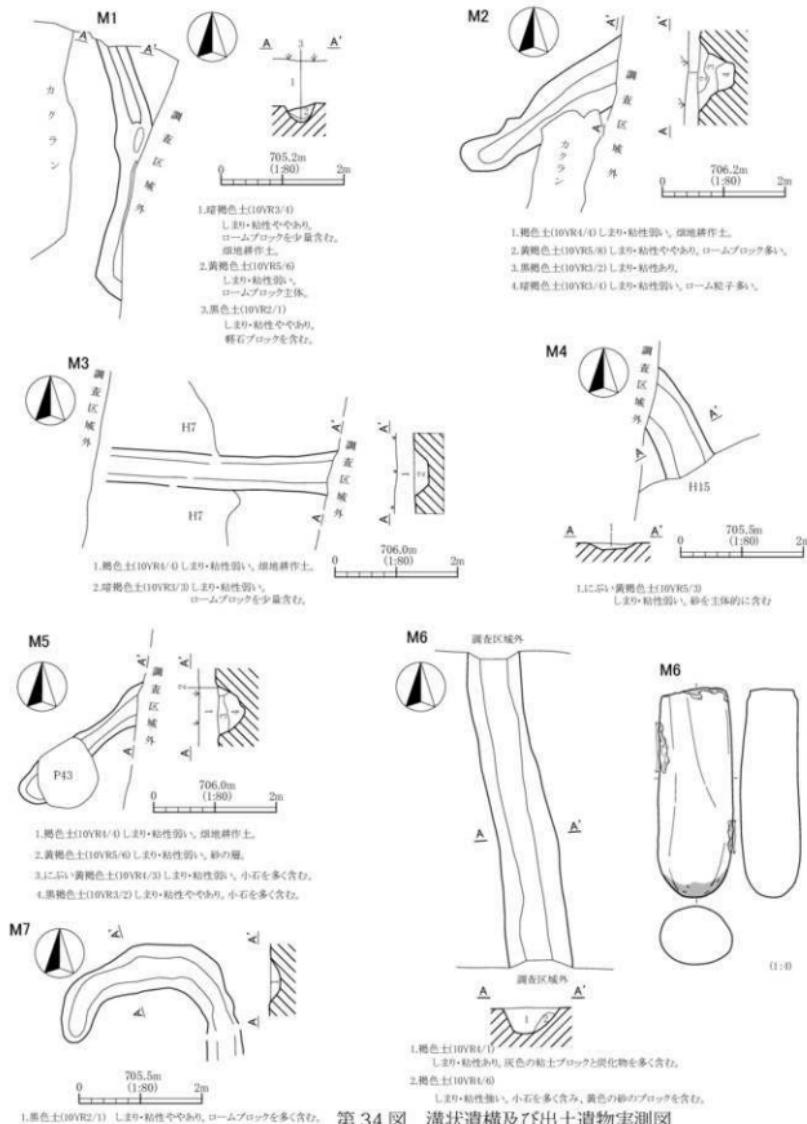
(7) M7 号溝状遺構

本址は調査区南、エ -9 、オ -8・9Gr で検出された。溝断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。検出長は 3.73m 、幅 0.50 ~ 0.74m 、深さ 0.09 ~ 0.15m である。形態は円形に屈曲しており、形状はいわゆる円形周溝墓的な様相を示す。本址からの出土遺物は弥生高坏片、弥生壺・甕片、鉢があった。本址の所産時期は不確実であるが、弥生後期箱清水期と考えられる。

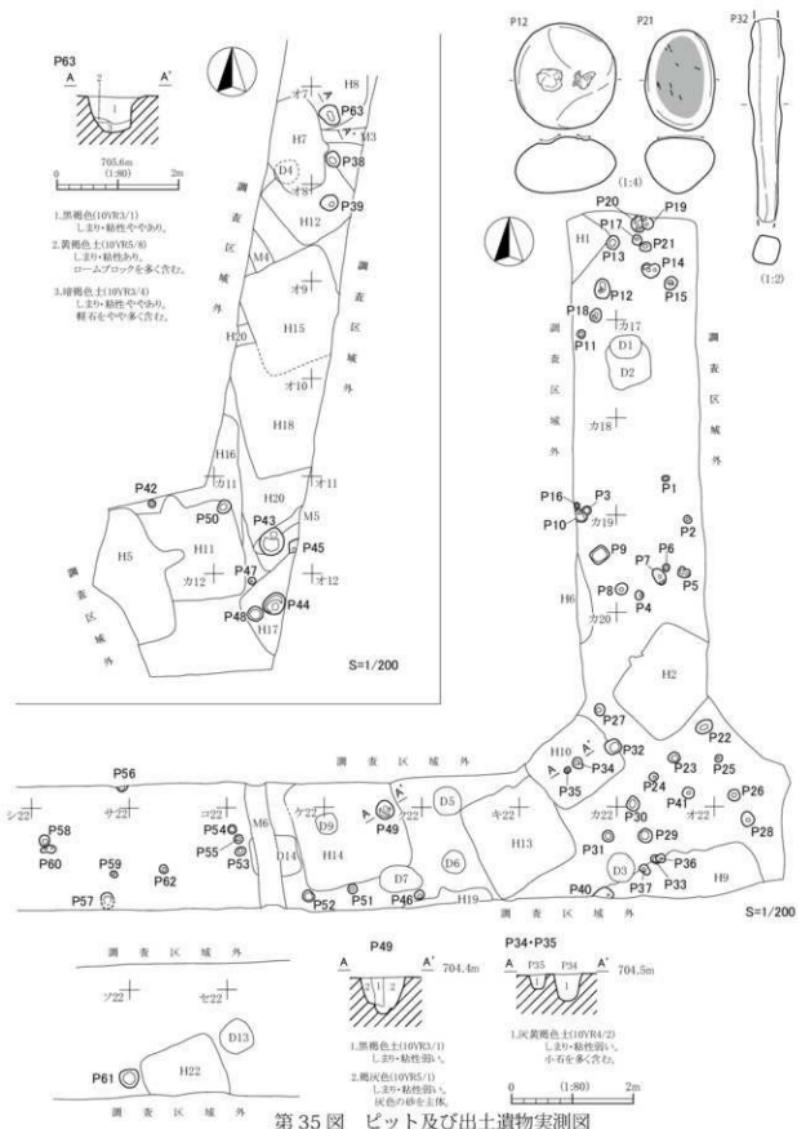
4. ピット

今回の発掘調査では 63 基の単独ピットを調査した。調査範囲が道路幅範囲と限定されているため、掘立柱建物址に認定できるピットは確認できなかったが、D 5 号土坑—P 49 —D 9 号土坑の並びは北に広がる掘立柱建物址の可能性が指摘できる。また、 P 22 —P 23 —P 24 —P 30 —P 31 は柵列として捉えられるかもしれない。

各ピットの出土遺物は計測表に記載したが、いずれも小片であり図化できるものは無かった。また、出土遺物よりピットの所産時期を確定できるものもなく、遺構の新旧関係より導き出された先後関係しか把握できなかった。



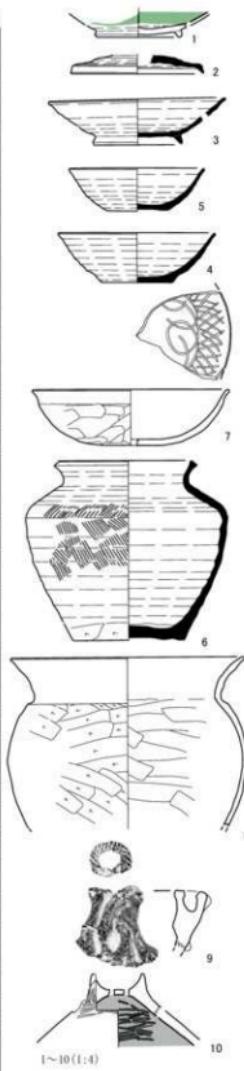
第34図 溝状遺構及び出土遺物実測図



第35図 ピット及び出土遺物実測図

第2表 ピット計測表

No.	検出位置	形態	長径	短径	深さ	出土遺物・備考	
						単位 m ()	推定 < > 残存
1	才一18	円形	0.28	0.25	0.06		
2	才一19	円形	0.35	0.33	0.16	弥生壺	
3	才一18・19	円形	0.38	0.34	0.13		
4	才一19	円形	0.40	0.35	0.21	須恵壺	
5	才一19	不整形	0.52	0.32	0.10		
6	才一19	円形	0.31	0.29	0.11		
7	才一19	椭円形	0.75	0.44	0.21	須恵壺	
8	才一19	円形	0.54	0.49	0.16		
9	才一19	方形	0.74	0.64	0.50	須恵壺・甕 土師壺 弥生壺	
10	才一18・19	不整形	0.58	<0.33>	0.22	須恵壺 土師壺	
11	才一17	円形	0.36	0.32	0.09		
12	才一16	椭円形	0.82	0.61	0.70	土師内黒环	
13	才一才一16	円形	0.58	0.50	0.18	土師内黒环	
14	才一16	不整形	0.74	0.56	0.40	弥生甕	
15	才一16	円形	0.62	0.54	0.57	土師甕	
16	才一18	円形	0.24	0.19	0.14		
17	才一16	円形	0.48	0.40	0.29		
18	才一16・17	円形	0.54	0.45	0.62		
19	才一15・16	椭円形	<0.54>	0.44	0.62		
20	才一15・16	椭円形	0.69	0.44	0.55		
21	才一16	円形	0.49	0.40	0.11		
22	才一21	椭円形	0.75	0.52	0.56	須恵環・甕 土師甕	
23	才一21	円形	0.50	0.46	0.28	須恵環 土師環	
24	才一21	円形	0.37	0.33	0.17		
25	江一21	円形	0.30	0.28	0.24		
26	江一21	円形	0.48	0.48	0.34	土師甕 弥生甕	
27	江一20・21	円形	0.51	0.45	0.18	土師内黒环	
28	江一22	円形	0.57	0.54	0.57	須恵甕 土師甕 弥生甕	
29	才一22	円形	0.57	0.52	0.29	須恵環・甕 弥生環・甕	
30	才一21・22	円形	0.64	0.50	0.17	須恵蓋 土師甕	
31	才一22	円形	0.47	0.44	0.28		
32	才一才一21	方形	0.69	0.59	0.29	須恵環 土師甕 弥生甕	
33	才一22	円形	0.41	0.37	0.13	土師内黒环	
34	才一21	不整形	0.52	0.46	0.43	須恵環 土師環	
35	才一21	円形	0.29	0.25	0.27	須恵環	
36	才一22	円形	0.44	0.36	0.49	土師環	
37	才一22	円形	0.40	0.33	0.41	土師皿・甕	
38	江一7	円形	0.65	0.57	0.36		
39	江一8	円形	0.75	0.66	0.54	須恵蓋	
40	江一22	一	0.76	<0.48>	0.73	灰釉瓶	
41	才一21	円形	0.48	0.46	0.33	土師内黒环	
42	才一11	円形	0.34	0.34	0.32		
43	才一11	椭円形	1.15	0.97	0.68	土師甕 弥生甕	
44	才一12	円形	0.99	0.80	0.92	土師甕 (武藏)	
45	才一11	一	<0.53>	<0.30>	0.26	須恵甕	
46	キ一ク一22	円形	0.39	0.38	0.29	弥生甕	
47	才一12	円形	0.33	0.32	0.37		
48	才一12	円形	0.59	0.54	0.58	土師甕 (武藏)	
49	才一21・22	円形	0.74	0.67	0.61	須恵高环・甕 土師内黒环・甕	
50	才一11	円形	0.56	0.52	0.15		
51	ケ一22	円形	0.45	0.35	0.16		
52	ケ一22	円形	0.48	0.44	0.08		
53	ケ一22	円形	0.48	0.33	0.11		
54	ケ一22	円形	0.35	0.32	0.07	土師内黒环	
55	ケ一22	円形	0.37	0.35	0.13	土師甕 (武藏)	
56	サ一21	一	0.40	<0.21>	0.10	土師環	
57	コ一サ一22・23	椭円形	(0.66)	(0.53)	0.19		
58	サ一22	円形	0.50	0.42	0.18	須恵甕	
59	サ一22	円形	0.31	0.26	0.17		
60	サ一22	不整形	0.64	0.26	0.46	須恵甕	
61	セ一ゾ一22	円形	0.78	0.76	0.36		
62	コ一22	円形	0.40	0.34	0.26		
63	エ一7	椭円形	0.75	0.53	0.65		



第36図 グリッド遺物実測図

H2	種別	形態	成形・調査・文様						指定地()残存地()発掘●	
			口径(Φ)	底座(Φ)	高さ(厚)	内面			外面	備考
1	土師器	坪	11.5	—	3.5	ナデ	11縁コナダ・ヘラケズリ	回転美術	カマツ	
2	土師器	坪	12.0	0.9	3.8	見附→幅の広いヒガキ	ロクロナダ・底面回転木切(左)	回転美術	ケン	
3	土師器	高岸(脚)	—	—	—	ヘラナダ・茎色地埋ヘラヒガキ	ヘラケズリ	完全美術	ケン	
4	土師器	武蔵窯	20.3	—	7.3	11縁コナダ・ヘラナダ	11縁コナダ・ヘラケズリ	完全美術	西区・ケン	
5	土師器	武蔵窯	—	0.7	11.3	ヘラナダ	ヘラケズリ	完全美術	1区・カマツ	

H4	種別	形態	成形・調査・文様						指定地()残存地()発掘●		
			口径(Φ)	底座(Φ)	高さ(厚)	内面			外面	備考	
1	石器	砾石	15.1	7.2	6.0	77.13	被熱化・研磨數	右側に圓形に削痕	完全美術		
2	石器	砾石	15.5	7.2	5.4	95.9.17	被熱化(一部風化)	頭部と辺に敲打痕	西区		
3	金属製品	角鉗?	(9.9)	(8.9)	(0.8)	(15.12)	先端欠損		西区		

H5	種別	形態	成形・調査・文様						指定地()残存地()発掘●		
			口径(Φ)	底座(Φ)	高さ(厚)	内面			外面	備考	
1	灰陶壺	蓋	15.0	7.2	2.5	ロクロナダ・施輪(左)付(右)	ロクロナダ・施輪(左)付(右)	高台船材	回転美術	1区	
2	灰陶壺	瓶	13.0	6.2	4.1	ロクロナダ・施輪(左)付(右)	ロクロナダ・高台船材・施輪(左)付(右)	回転美術	1区		
3	灰陶壺	瓶	12.0	6.0	4.1	ロクロナダ・施輪(左)付(右)	ロクロナダ・高台船材・施輪(左)付(右)	回転美術	ケン		
4	灰陶壺	瓶	16.2	9.0	5.2	ロクロナダ・施輪(左)付(右)	ロクロナダ・高台船材・施輪(左)付(右)	回転美術	1区・ケン		
5	灰陶壺	瓶	—	—	—	ロクロナダ・施輪(左)付(右)	ロクロナダ・底面回転木切(右)	回転美術	西区		
6	灰陶壺	坪	11.1	3.2	3.4	ロクロナダ	ロクロナダ・底面回転木切(右)	高台船材(火候)	完全美術	1区・西区	
7	灰陶壺	坪	12.9	7.5	3.4	ロクロナダ	ロクロナダ・底面木切(右)	完全美術	西区		
8	灰陶壺	坪	14.0	8.0	3.6	ロクロナダ	ロクロナダ・底面回転木切(右)	回転美術	西区		
9	土師器	坪	11.0	3.7	3.6	ロクロナダ	ロクロナダ・底面回転木切(右)	完全美術	西区・埋付着	1区	
10	土師器	坪	12.7	4.8	4.2	ロクロナダ	ロクロナダ・底面回転木切(右)	完全美術	1区・西区		
11	土師器	坪	12.2	4.4	3.4	ロクロナダ	ロクロナダ・底面回転木切(右)	完全美術	西区		
12	土師器	坪	11.0	5.2	3.8	ロクロナダ	ロクロナダ・底面回転木切(右)	完全美術(縫隙内 に埋付着)	1区		
13	土師器	坪	12.0	6.0	3.6	ロクロナダ	ロクロナダ・底面回転木切(右)	回転美術	1区		
14	土師器	坪	12.3	6.1	3.8	ロクロナダ・黑色處理	ロクロナダ・底面回転木切(右)	完全美術 内表面に埋付着	完全美術		
15	土師器	坪	11.8	3.2	3.4	ロクロナダ・ヒガキ→黑色處理	ロクロナダ・底面回転木切(右)	完全美術	1区		
16	土師器	坪	11.0	4.6	4.3	ロクロナダ・ヒガキ・蓝色處理	ロクロナダ・底面回転木切(右)	完全美術	1区・ケン		
17	土師器	坪	12.0	6.0	4.0	ロクロナダ・ヒガキ→黑色處理	ロクロナダ・底面回転木切(右)	回転美術	1区・西区		
18	土師器	瓶	13.0	—	—	ロクロナダ・ヒガキ→黑色處理	ロクロナダ・底面回転木切(右)→高台船材(火候)	回転美術	1区		
19	土師器	坪	12.9	6.5	3.8	ロクロナダ・ヒガキ→黑色處理	ロクロナダ・底面回転木切(右)	完全美術	西区		
20	土師器	瓶	12.2	9.2	5.0	ヒガキ→黑色處理	ロクロナダ・底面回転木切(右)→高台船材(火候)	回転美術	ケン		
21	土師器	瓶	14.0	7.1	5.8	ヒガキ→黑色處理	ロクロナダ・底面木切→高台船材	完全美術	完全美術	1区	
22	土師器	坪	—	—	—	ヒガキ→黑色處理	ロクロナダ	完全美術	西区		
23	土師器	坪	—	—	—	ヒガキ・暗文→黑色處理	ロクロナダ	完全美術	ケン		
24	土師器	瓶	11.0	6.0	4.7	ヒガキ→黑色處理	ロクロナダ・底面木切→高台船材	回転美術	1区・ケン		
25	土師器	瓶	14.0	7.6	5.5	ロクロナダ・暗文・ヒガキ→黑色處理	ロクロナダ・底面木切→高台船材	完全美術	1区・西区		
26	土師器	瓶	15.0	7.9	5.2	ロクロナダ	ロクロナダ・底面木切→高台船材	完全美術	西区		
27	土師器	瓶	16.0	7.7	6.6	ヒガキ→黑色處理	ロクロナダ・底面木切→高台船材	完全美術(底部に ヒガキ(造痕))	1区		
28	土師器	坪	—	—	6.0	(1.4) ロクロナダ	ロクロナダ・底面回転木切	回転美術	1区		
29	土師器	瓶	11.0	—	—	ロクロナダ・暗文・ヒガキ	ロクロナダ・底面木切→高台船材(火候)	回転美術	西区		
30	土師器	瓶	12.0	—	—	ロクロナダ・暗文・ヒガキ	脚部・ヒガキ→隠れヒガキ	回転美術	1区・西区		
31	土師器	瓶	—	9.2	3.0	ヒゲメ	ヒゲメ	完全美術	西区		
32	金属製品	円筒具	(9.8)	(4.3)	(0.0)	(18.73)	片端欠損	備考	出土位置	出土位置	
33	金属製品	舟型	(10.5)	(9.2)	(0.7)	(21.65)	両端欠損	備考	カマツ		

H7	種別	形態	成形・調査・文様						指定地()残存地()発掘●		
			口径(Φ)	底座(Φ)	高さ(厚)	内面			外面	備考	
1	瓦	瓦	13.2	—	—	(4.3) ロクロナダ	ロクロナダ・自然釉(瓦)	回転美術	西区・ケン		
2	土師器	瓶	—	7.3	(2.7)	ロクロナダ・ヘラシガキ見附部・埋付着	ロクロナダ・底面回転木切→高台船材	完全美術	ケン		
3	土師器	瓶	—	8.6	(3.6)	ロクロナダ	ロクロナダ・底面・高台船材	回転美術	西区・ケン		
4	土師器	坪	13.0	7.0	3.4	ロクロナダ・暗文・ヒガキ	ロクロナダ・底面・回転木切	回転美術	西区・ケン		
5	土師器	坪	12.8	5.9	3.8	ロクロナダ・暗文・ヒガキ	ロクロナダ・底面・回転木切	完全美術(内・外 面口縁付着)	西区		
6	土師器	坪	12.0	5.0	3.9	ロクロナダ・暗文・ヒガキ	ロクロナダ・底面	回転美術	ケン		

H9	種別	器種	法 番			成形・調整・文様		指定標印・特徴印・丸印●		
			口径(Φ)	底径(Φ)	高さ(厚)	内 面	外 面	備考	出土位置	
1	灰陶陶器	瓶	-	36.0	(1.1)	ロクロナデ 斜面	ロクロナデ ヘラクゼリ-付高台	印和文鏡	I 区	
2	灰陶器	高所	-	32.2	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	印和文鏡	I 区	
3	直腹器	坪	(12.0)	-	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	印和文鏡	Ⅱ区	
4	直腹器	坪	(12.0)	9.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ 亂刷 回転点切り	印和文鏡	カツリ	
5	直腹器	坪	(13.0)	6.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ 亂刷 回転点切り 黒色地紋?	完全全剥離	カツリ I 区	
6	直腹器	坪	(15.0)	9.0	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ 亂刷 回転点切り 黑色地紋?	印和文鏡	I 区	
7	直腹器	甕	-	34.0	(5.0)	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ ヘラナデ 亂刷-底面開口 ヘラケズリ	印和文鏡	カツリ I 区	
8	直腹器	甕	-	31.0	(7.0)	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ 亂刷-底面開口 ヘラケズリ	印和文鏡	I II 区	
9	直腹器	甕	-	-	(18.0)	ロクロナデ 当具柄	ロクロナデ 平行タテキ	印和文鏡	I II 区	
10	直腹器	甕	38.0	-	(15.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 平行タテキ	印和文鏡	Ⅱ区	
11	直腹器	甕	(14.0)	-	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	印和文鏡	I 区 カツリ	
12	直腹器	甕	-	(18.0)	ロクロナデ 当具柄	ロクロナデ 平行タテキ	印和文鏡	I II 区 カツリ		
13	土師器	坪	(12.0)	8.0	4.0	ロクロナデ 黒色地紋	ロクロナデ 亂刷 回転点切り	印和文鏡	Ⅱ区	
14	土師器	坪	(15.0)	8.0	4.0	ロクロナデ ヘラタガ 黑色地紋	ロクロナデ 亂刷 回転点切り	印和文鏡	カツリ	
15	土師器	坪	13.0	6.0	4.0	ロクロナデ ヘラタガ	ロクロナデ 亂刷 回転点切り	完全全剥離	カツリ	
16	土師器	坪	(12.0)	-	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	印和文鏡	Ⅱ区	
17	土師器	坪	-	30.0	(3.0)	ロクロナデ ヘラタガ	ロクロナデ 亂刷 回転点切り-ヘラケズリ	印和文鏡	I 区 カツリ	
18	土師器	坪	14.2	6.2	4.2	ロクロナデ 縦文 黑色地紋	ロクロナデ 亂刷 右回転点切り	完全全剥離	カツリ	
19	土師器	甕	(15.0)	7.8	9.2	ロクロナデ 縦文 黑色地紋	ロクロナデ 亂刷 回転点切り 高台錐付	完全全剥離	I 区 水下 I 区	
20	土師器	甕	14.1	6.6	9.7	ロクロナデ ヘラタガ 黑色地紋	ロクロナデ 亂刷 回転点切り 高台錐付	完全全剥離	I 区	
21	土師器	坪	(14.0)	-	(3.0)	ロクロナデ ヘラタガ	ロクロナデ ヘラケズリ	印和文鏡	Ⅱ区	
22	土師器	甕	16.4	-	(14.0)	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ	完全全剥離	I 区 カツリ	
23	土師器	甕	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 各目 回転-ヘラケズリ	印和文鏡	Ⅱ区	
24	土師器	甕	(31.0)	-	(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 亂刷 カ今日	印和文鏡	B 区	

H10	種別	器種	法 番			成形・調整・文様		指定標印・特徴印・丸印●		
			口径(Φ)	底径(Φ)	高さ(厚)	内 面	外 面	備考	出土位置	
1	直腹器	甕	-	-	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ まみ錐付 天井部回転-ヘラケズリ	完全全剥離	Ⅱ区	
2	直腹器	甕	-	-	(2.5)	ロクロナデ	ロクロナデ まみ錐付 天井部回転-ヘラケズリ	完全全剥離	Ⅱ区	
3	土師器	高所	(20.0)	-	(3.0)	ヘラタガ	ヘラタガ	印和文鏡	Ⅱ区	
4	土師器	甕	-	-	(2.0)	ロクロナデ ヘラタガ	ヘラタガ	完全全剥離	I 区	
5	土師器	甕	-	-	(5.0)	ナラナデ	ナラタガ	完全全剥離	I II JV 区	
6	土師器	甕	(22.0)	-	(9.0)	ロクロナデ ヘラタガ	ロクロナデ	印和文鏡	I 区	

H11	種別	器種	法 番			成形・調整・文様		指定標印・特徴印・丸印●		
			口径(Φ)	底径(Φ)	高さ(厚)	内 面	外 面	備考	出土位置	
1	灰陶陶器	瓶	-	8.7	(2.0)	ロクロナデ 斜面	ロクロナデ 亂刷ひれいたもの 高台錐付	完全全剥離	Ⅱ区	
2	直腹器	甕	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 亂刷-底面開口	侧面文鏡	Ⅱ区 JV 区	
3	直腹器	坪	-	-	-	ロクロナデ	-	印和文鏡	Ⅱ区	
4	土師器	坪	-	-	-	黒色地紋	ロクロナデ 墓蓋	縦片文鏡	Ⅱ区 JV 区 ポリ	
5	土師器	坪	-	-	-	黒色地紋	ロクロナデ 墓蓋	縦片文鏡	Ⅱ区	
6	土師器	坪	(14.0)	8.0	3.6	黒色地紋-縦文	ロクロナデ 亂刷回転点切り	印和文鏡	I 区	
7	土師器	坪	(13.0)	6.0	0.9	ヘラタガ 縦文	ロクロナデ 亂刷回転点切り	印和文鏡	II 区	
8	土師器	坪	13.2	5.8	4.2	ナダ	ロクロナデ 見込み縫-ヘラタガ	ロクロナデ 亂刷回転点切り(4)	完全全剥離	
9	土師器	坪	12.0	5.6	3.3	ロクロナデ 見込み縫-ヘラタガ	ロクロナデ 亂刷回転点切り(4)	完全全剥離	I 区	
10	土師器	坪	12.6	6.1	1.1	ヘラタガ	ロクロナデ 亂刷回転点切り(4)	完全全剥離	I 区 水下	
11	土師器	坪	(12.0)	5.6	3.2	ヘラタガ 縦文	ロクロナデ 亂刷-ヘラケズリ	完全全剥離	Ⅱ区	
12	土師器	小型 ロクロノミ	(13.0)	-	(13.0)	ロクロナロナデ ヘラナデ	ロクロナロナデ ヘラケズリ	印和文鏡	I 区 JV 区 カツリ	

H12	種別	器種	法 番			成形・調整・文様		指定標印・特徴印・丸印●		
			口径(Φ)	底径(Φ)	高さ(厚)	内 面	外 面	備考	出土位置	
1	直腹器	坪	(13.0)	8.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ 亂刷回転点切り	印和文鏡	Ⅱ区 小?	
2	直腹器	坪	14.3	7.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ 亂刷回転点切り	完全全剥離	II 1	
3	直腹器	坪	(13.2)	-	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	印和文鏡	I 区	
4	直腹器	坪	-	6.5	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 亂刷回転点切り	完全全剥離	Ⅱ区 JV 区	

5	土師器	井	(1.0)	6.9	4.7	ヘラ ^{サガ} 黄色處理	ロフナナデ 造形底及び側面周縁部右回転<→カケズリ	完全実測	ケン
6	土師器	瓶	-	2.3	(2.2)	ヘラ ^{サガ} 黄色處理	ロフナナデ 造形側面切口→高台貼付	完全実測	西区 ケン
7	土師器	甕	G1.2	-	(9.8)	ロクロナデ	ロフナナデ ヘラナデ	回転実測	ケン エ-8
8	土師器	甕	G3.0	-	(11.4)	ハケ目	ロフナナデ	回転実測	西区 ホリ
9	土師器	鉢	G2.0	(5.0)	(10.0)	ヘラナデ ハラ ^{サガ} 黄色處理	ロフナナデ 体部下端及び側面周縁部 ヘラケズリ タタキ	回転実測	H7
						盤	回転実測	B区	D4

H13	種別	器種	法 番			成形・調整・文様			指定地()残存地()凶呂●	
			口径(奥)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面	編 号	出土位置	
1	瓦底器	蓋	14.8	-	4.5	ロフナナデ 火打 ^{サガ} 黄色處理	ロフナナデ 火打 ^{サガ} 灰瓦部 右回転<→カケズリ	完全実測	I-B 北区	
2	瓦底器	蓋	16.2	-	4.8	ロクロナデ	ロフナナデ 火打部 右回転<→カケズリ	完全実測	I-B 北区 オリ	
3	瓦底器	所	13.6	6.1	3.2	ロフナナデ	ロフナナデ 造形右回転系切口	完全実測	西区	
4	瓦底器	井	(13.0)	6.1	3.9	ロフナナデ	ロフナナデ 造形右回転系切口	完全実測	西区 瓦底ホリ	
5	瓦底器	井	(13.0)	6.0	3.6	ロフナナデ 火打 ^{サガ} 黄色處理	ロフナナデ 火打 ^{サガ} 右回転系切口	完全実測	I-B 北区 瓦底ホリ	
6	瓦底器	所	(13.0)	7.0	4.0	ロフナナデ	ロフナナデ 火打 ^{サガ} 黄色處理	回転実測	西区	
7	瓦底器	井	13.1	7.2	3.2	ロクロナデ	ロフナナデ 造形右回転系切口	完全実測	西区	
8	瓦底器	井	(12.0)	10.0	4.5	ロフナナデ 火打 ^{サガ} 黄色處理	ロフナナデ 火打 ^{サガ} 右回転系切口	回転実測	西区	
9	瓦底器	甕	-	(10.0)	(12.0)	ヘラナデ	タタキ ^{サガ} 造形右回転<→カケズリ	回転実測	西区	
10	瓦底器	実物付 四耳釜	-	-	-	当直瓶	ロフナナデ タタキ	断面実測	I 区	
11	瓦底器	蓋	-	9.0	3.0	ロフナナデ	ロフナナデ 造形回転<→カケズリ ^{サガ} 高台瓶付	断面実測	西区 福本	
12	土師器	井	13.5	6.0	3.2	ヘラ ^{サガ} 黄色處理	ロフナナデ 造形切口 造形周辺<→カケズリ	完全実測	西区	
13	土師器	所	14.2	7.1	3.6	ヘラ ^{サガ} 黄色處理	ロフナナデ 造形 ^{サガ} 造形<→カケズリ	完全実測	カヤド	
14	土師器	井	(13.0)	7.0	3.4	ヘラ ^{サガ} 黄色處理	ロフナナデ 造形周辺系切口	回転実測	難波ホリ IV区	
15	土師器	井	(13.0)	6.0	3.6	ロフナナデ 黄色處理	ロフナナデ 造形<→カケズリ	回転実測	西区	
16	土師器	所	(13.0)	7.0	4.5	ロフナナデ 備付着	ロフナナデ 精材付 造形周辺系切口	回転実測	ケン	
17	土師器	甕	(18.0)	-	(11.0)	ヘラナデ	ヘラ ^{サガ}	回転実測	難波 I 区	
No.	器種	蓋 材	施大底	施大幅	施大厚	重 量	備考		出土位置	
18	金剛製品	刀子	(18.0)	○○○	(1.2)	(33.90)	両面欠損 木質持込 日引2号所?			I 区ホリ

H14	種別	器種	法 番			成形・調整・文様			指定地()残存地()凶呂●	
			口径(奥)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面	編 号	出土位置	
1	瓦底器	右合併	14.6	8.9	0.6	ロフナナデ	ロフナナデ 造形周辺系切口 高合貼付	完全実測	I 区	
2	瓦底器	均合併	14.1	7.4	4.3	ロクロナデ	ロフナナデ 造形 右回転系切口	完全実測	ホリホリ	
3	瓦底器	所	(12.0)	10.0	3.6	ロフナナデ	ロフナナデ 造形 右回転系切口	回転実測	I 区 西区	
4	瓦底器	井	(13.0)	17.0	(5.0)	ロフナナデ	ロフナナデ 造形 右回転系切口	回転実測	西区	
5	土師器	井	(15.0)	9.0	5.8	ロクロナデ ハラ ^{サガ} 黄色處理	ロフナナデ 造形 ハラ ^{サガ}	回転実測	西区	
6	土師器	井	(10.0)	11.0	1.8	ロクロナデ ナダ ^{サガ} 黄色處理	ロフナナデ 造形 右回転系切口	回転実測	西区	
7	土師器	瓶	-	8.1	(2.8)	ロフナナデ	ロフナナデ 造形 回転角切り 高台瓶付	完全実測	難波	
8	土師器	瓶	-	8.0	(2.8)	ロフナナデ	ロフナナデ 造形 回転角切り 高合貼付	完全実測	西区	
No.	器種	蓋 材	施大底	施大幅	施大厚	重 量	備考		出土位置	
9	石器	粘土膏	最大底	最小径	1.2	93.65	孔径 0.9~1.0 密熱なし 正面上部に刻文			

H15	種別	器種	法 番			成形・調整・文様			指定地()残存地()凶呂●	
			口径(奥)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面	編 号	出土位置	
1	灰軸陶瓶	瓶	-	6.3	(2.9)	ロクロナデ ^{サガ} 輪輪(△)火打(△)	造形切口 輪輪一済合貼付(△)火打(△)	完全実測	ケン	
2	瓦底器	蓋	7.3	2.9	2.3	ロクロナデ	ロフナナデ ^{サガ} 火打 ^{タマニ} 左合貼付	完全実測	ホリホリ	
3	瓦底器	所	(13.0)	(5.0)	4.0	ロクロナデ	ロフナナデ ^{サガ} 造形周辺系切口(△)	回転実測	II 区	
4	瓦底器	井	(13.0)	5.0	4.2	ロクロナデ	ロフナナデ ^{サガ} 造形周辺系切口(△)	完全実測	山野村 ^{モロイ} ケン	
5	瓦底器	所	(13.0)	6.0	4.0	ロクロナデ ^{サガ} 絆文 ^{タマニ} 黑色處理	ロフナナデ ^{サガ} 造形周辺系切口(△)	回転実測	西区	
6	土師器	井	(12.0)	5.6	4.3	紹文 ^{タマニ} 黑色處理	ロフナナデ ^{サガ} 造形周辺系切口(△)	完全実測	ケン	
7	土師器	井	12.5	5.8	1.1	紹文 ^{タマニ} 黑色處理	ロフナナデ ^{サガ} 造形周辺系切口(△)	完全実測	ケン	
8	土師器	所	(13.0)	6.0	4.6	ミガキ ^{タマニ} 黑色處理	ロフナナデ ^{サガ} 造形周辺系切口(△)	回転実測	II 区	
9	土師器	井	(15.0)	-	(4.0)	ミガキ ^{タマニ} 黑色處理	ロフナナデ ^{サガ} 造形周辺系切口(△)	回転実測	西区	
10	土師器	ロクロ ^{サガ}	(23.0)	-	(3.4)	カキメ	カキメ	回転実測	ケン	
No.	器種	蓋 材	施大底	施大幅	施大厚	重 量	備考		出土位置	
11	石器	磨石	14.2	6.7	5.6	911.76	密熱なし			
12	石器	磨石	13.0	3.5	2.2	163.56	密熱なし			

H17	種別	器種	法 番			成形・調整・文様			指定地()残存地()凶呂●	
			口径(奥)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面	編 号	出土位置	
1	瓦底器	井	(13.0)	(6.0)	(3.2)	ロクロナデ	ロフナナデ		回転実測	
2	瓦底器	甕	-	-	-	ロクロナデ ハラナデ	ロフナナデ 平行タタキ		断面実測	
3	土師器	甕	-	-	(4.0)	ハラナデ	ヘラ ^{タマニ}		回転実測	
No.	器種	蓋 材	施大底	施大幅	施大厚	重 量	備考		出土位置	
1	石器	砾石	(9.0)	(3.0)	(0.6)	(223.70)	密熱なし 上部欠損 砂面物 磨擦の条剥離			

H18	種別	器種	法 番			成形・調整・文様		指定標()残存標()丸底●	備 考	出土位置
			口径(奥)	直径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	土師器	片	-	-	-	ロアノナデ	ロアノナデ 番垂	横片瓦頭	ケン	
2	土師器	片	0.130	5.1	3.3	ロアノナデ 見込部 回転 ハナナデ	ロアノナデ 底部 石切	完全瓦頭	基	
3	土師器	片	0.130	5.0	3.7	ロアノナデ	ロアノナデ 底部 回転 石切	完全瓦頭	基	
No.	器種	材	最大径	最大幅	最大厚	面 形	備 考			
4	石器	帆立貝	8.9	6.0	3.0	215.29	被熱なし 破損数5 正面と右側に左側に押出の使用痕			出土位置
5	石器	帆立貝	10.8	8.2	3.5	528.88	被熱なし すり凹2 正面に縦打痕			

H19	種別	器種	法 番			成形・調整・文様		指定標()残存標()丸底●	備 考	出土位置
			口径(奥)	直径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	瓦	片	0.140	9.0	3.9	ロアノナデ	ロアノナデ 底部～底面周縁 ハラカズリ	回転瓦頭		
2	瓦	片	0.160	9.0	3.5	ロアノナデ	ロアノナデ 底部 切削 ハラカズリ 基台付	回転瓦頭		
3	瓦	片	-	10.0	(5.7)	ロアノナデ	ロアノナデ 底部～底面周縁 ハラカズリ	回転瓦頭		
4	瓦	片	-	-	-	ロアノナデ	ロアノナデ 当具板 ハカナデ	ロアノナデ 平手打内	横片瓦頭	カバリ
5	土師器	片	0.125	-	(2.3)	ハナナデ→11番ロアノナデ	ハラカズリ→11番ロアノナデ	回転瓦頭		
6	土師器	片	0.140	-	(6.0)	ハナナデ	口縁コックマークカズリ	回転瓦頭		

H21	種別	器種	法 番			成形・調整・文様		指定標()残存標()丸底●	備 考	出土位置
			口径(奥)	直径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	瓦	片	-	-	(1.0)	ロアノナデ	ロアノナデ 外部端面斜傾 ハラカズリ	完全瓦頭	基	
2	瓦	片	13.4	8.1	3.9	ロアノナデ	ロアノナデ 大だき幅 底面周縁ハラカズリ	完全瓦頭	ケン	
3	瓦	片	-	-	0.20.0	(1.0)	ナデ	ハラカズリ	回転瓦頭	ケン
4	土師器	片	0.225	0.00	3.7	ロアノナデ	ロアノナデ 稲村章 底部右端面斜傾	回転瓦頭	基カリ	
5	土師器	片	12.6	5.8	4.0	ロアノナデ	ロアノナデ 底部右端面斜傾	完全瓦頭	基	背
6	土師器	片	-	-	(0.2)	ロアノナデ	ロアノナデ 底部右端面斜傾 刻痕	回転瓦頭	基	
No.	器種	真材	最大径	最大幅	最大厚	面 形	備 考			
7	石器	帆立貝	13.0	9.1	5.4	955.05	被熱なし すり凹2			基

H22	種別	器種	法 番			成形・調整・文様		指定標()残存標()丸底●	備 考	出土位置
			口径(奥)	直径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	瓦	片	16.0	-	4.5	ロアノナデ	ロアノナデ 天然端斜傾 ハラカズリ	完全瓦頭		
2	瓦	空窓付四面瓦	-	-	-	当具板	当具板	手吹	断面瓦頭	
3	土師器	片	0.18.0	-	(0.8)	ハナナデ	ハラカズリ	回転瓦頭		

H3	種別	器種	法 番			成形・調整・文様		指定標()残存標()丸底●	備 考	出土位置
			口径(奥)	直径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	生糸	巻	-	-	(2.8)	ハカナデ	ハラカズリ上端子巻文 ハラカズリ巻文	回転瓦頭		
2	生糸	巻	-	-	(3.0)	ハカナデ	織機による前伏文 后伏文 ハラカズリ	完全瓦頭	ケン	
3	生糸	巻	-	-	(4.0)	ハラカズリ(裏面) ハカナデ(裏面)	織機による前伏文 ハラカズリ	完全瓦頭		
4	生糸	台付巻	-	-	(5.1)	ハラカズリ(裏面 内 ハラカズリ)	ハラカズリ ハラカズリ	完全瓦頭	ケン	
5	生糸	巻	0.14.0	-	(2.4)	ハカナデ	織機前伏文 織機後伏文 織機裏伏文(奥日本通字)	回転瓦頭		
6	生糸	巻	0.14.0	-	(18.1)	ハラカズリ	織機前伏文 織機裏伏文(奥日本通字)	回転瓦頭	ケン	
7	生糸	巻	0.15.0	-	(2.5)	ハラカズリ	織機前伏文 織機裏伏文(奥日本通字)	回転瓦頭	ケン	
8	生糸	巻	-	-	(4.2)	ハラカズリ	ハラカズリ 穴あわせ	完全瓦頭	ケン	

H8	種別	器種	法 番			成形・調整・文様		指定標()残存標()丸底●	備 考	出土位置	
			口径(奥)	直径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面				
1	生糸	路	-	-	(5.0)	ハラカズリ 歩道	ハラカズリ 歩道 歩道 ハラカズリ	回転瓦頭	区		
2	生糸	路	0.11.0	-	(5.0)	ハラカズリ 歩道	ハラカズリ 歩道	回転瓦頭			
3	生糸	路	-	-	(6.2)	ハラカズリ 歩道	ハラカズリ 歩道 歩道 ハラカズリ	完全瓦頭			
4	生糸	高所	-	-	-	ハラカズリ 歩道	ハラカズリ 歩道 口縁部 織機斜文右文	横片瓦頭			
5	生糸	高所	0.13.0	-	(10.7)	ハラカズリ 歩道 織機	ハラカズリ 歩道	完全瓦頭	基		
6	生糸	高所	-	-	(12.0)	井路 ハラカズリ 歩道 織機	ハラカズリ 歩道	完全瓦頭			
7	生糸	高所	-	-	(13.0)	ハカナデ	ハラカズリ 歩道	回転瓦頭	Ⅰ区 Ⅱ区 ケン		
8	生糸	巻	0.29.0	-	(13.0)	ハラカズリ 歩道	ハラカズリ 歩道 ハラカズリ 歩道	完全瓦頭	Ⅱ区		
9	生糸	巻	0.22.0	-	(13.0)	ハラカズリ 歩道	ハラカズリ 歩道 ハラカズリ 歩道	回転瓦頭	Ⅲ区 ケン		
10	生糸	巻	0.29.0	-	(13.0)	ハラカズリ 口縁→横道 歩道	ハラカズリ 口縁→横道 歩道	完全瓦頭	Ⅰ区 Ⅱ区		
11	生糸	巻	0.24.0	-	(12.1)	ハナナデ	織機 織機斜文(奥日本通字) 40番山	ハラカズリ 歩道	完全瓦頭	Ⅱ区 ケン	
12	生糸	巻	-	-	(21.0)	ハカヌメ	織機 織機斜文(奥日本通字) 織機 織機斜文(奥日本通字)	ハラカズリ 歩道	完全瓦頭	Ⅲ区 M4	

No.	圖	種	材	大きさ	断面	断面幅	断面厚	面積	備考	出土位置
50	右脚	磨石	磨石	10.1	2.3	4.0	814.96	被然なし、すり面	被然	
51	右脚	磨石	磨石	11.5	6.2	2.9	349.51	被然なし、すり面に磨打痕	被然	
52	右脚	磨石	磨石	10.8	5.7	2.5	255.27	被然なし、すり面。両端部の側面に磨打痕	被然	
53	右脚	磨石	磨石	11.3	8.6	3.6	375.63	被然なし、すり面。正面に磨打痕	被然	
54	右脚	磨石	磨石	10.5	6.0	3.5	332.36	被然なし、すり面。正面に磨打痕	被然	
55	右脚	磨石	磨石	14.5	7.4	4.5	679.57	被然なし、正裏に磨打痕	被然	
56	右脚	磨石	磨石	12.4	5.7	3.0	511.01	被然なし、周囲に磨打痕	被然	
57	右脚	磨石	磨石	12.5	6.9	6.0	757.01	被然なし、すり面に磨打痕	被然	
58	右脚	磨石	磨石	12.5	8.4	5.0	721.19	被然なし、すり面。正面に磨打痕	被然	
59	右脚	磨石	磨石	9.1	4.3	2.3	124.41	被然なし、すり面に磨打痕	被然	
60	右脚	磨石	磨石	6.9	5.2	2.8	151.27	被然なし、すり面	被然	
61	右脚	磨石	磨石	7.8	6.2	4.7	278.27	被然なし、すり面に磨打痕	被然	
62	右脚	砾石	砾石	7.6	9.4	5.7	645.03	被然なし、上部へ磨面大長。砾面4	被然	
13	拘生	漆	-	-	29.8	口縁 ヘラガリ→赤彩 底面 ハケメ		圓底 /ヘラガリ→黒絞毛走文 口縁 ヘラガリ→赤彩	完全実測	ケン
14	拘生	漆	-	-	10.5	ハケナダ 口縁→底面 ヘラガリ 赤彩		ヘラガリ 赤彩 圓底 /ヘラガリ→黒絞毛走文 内削突文	被然実測	Ⅱ区
15	拘生	漆	-	-	11.0	ハケナダ 口縁→底面 ヘラガリ 赤彩		ヘラガリ 赤彩 圓底 /ヘラガリ→黒絞毛走文 △ハケナダ文の内部に削突文	被然実測	Ⅱ区
16	拘生	漆	-	-	-	ハケナダ		ヘラガリ 赤彩 圓底 細縫横糸文△ハケナダ文の内部に削突文	被然実測	Ⅱ区
17	拘生	漆	-	-	-	ハケナダ		ヘラガリ 赤彩 圓底 /ヘラガリ→黒絞毛走文	被然実測	ケン
18	拘生	漆	-	-	-	ハケナダ		ヘラガリ 赤彩 圓底 /ヘラガリ→黒絞毛走文	被然実測	Ⅱ区
19	拘生	漆	-	-	34.8	摩利		摩利 摩利文(本体) ヘラシガキ	被然実測	Ⅱ区
20	拘生	漆	-	9.9	32.7	ハケメ 上部ナダ		ハラシガキ→赤彩	完全実測	Ⅱ区 ケン
21	拘生	漆	-	10.0	25.7	ハケメ		ハラシガキ→赤彩	被然実測	Ⅰ区,Ⅱ区
22	拘生	漆	-	11.0	18.0	ハケメ		ハラシガキ→赤彩	被然実測	Ⅱ区,ケン
23	拘生	漆	-	10.3	7.7	摩利		ハラシガキ→赤彩	完全実測	ケン
24	拘生	漆	-	10.0	6.0	ナダ		ハラシガキ→赤彩 底部 外側ヘラナダ	完全実測	
25	拘生	漆の 二次利用	06.2)	-	(7.5)	ハケメの残るナダ		□年 □年取取り	被然実測 他成物の 穿孔入り	
26	拘生	漆	22.5	6.5	22.3	ハケメ→ヘラガキ		被然状文 摩利状文(口本・2道止め) ヘラシガキ	完全実測	Ⅱ区
27	拘生	漆	17.7	8.0	23.7	エガキ		□年 摩利状文(日本・2道止め) 摩利状文	完全実測	
28	拘生	漆	12.3	7.8	23.5	エガキ		□年摩利状文(口本・2道止め) 摩利状文(5~7本)	完全実測	Ⅱ区
29	拘生	漆	13.6	6.0	(17.2)	エガキ		□年 摩利状文(15本・2道止め) 摩利状文	被然実測	Ⅱ区
30	拘生	漆	11.0	3.0	18.0	エガキ		△口本 摩利状文(18本・2道止め) 摩利状文	完全実測	Ⅱ区
31	拘生	漆	21.8	-	(17.3)	ヘラシガキ		摩利状文(口本・2道止め) 摩利状文	完全実測	Ⅱ区
32	拘生	漆	11.8	-	(7.4)	エガキ		摩利状文(口本・2道止め) 摩利状文 △口本~7本	完全実測	Ⅱ区
33	拘生	漆	19.3	-	(19.1)	ヘラシガキ		摩利状文 摩利斜走文△エガキ	完全実測	Ⅱ区
34	拘生	漆	29.0	-	(16.3)	ヘラシガキ		摩利状文 摩利状文(口本・2道止め)	被然実測	
35	拘生	漆	18.0	-	(16.8)	ハケメ→ヘラシガキ		ハケメ 摆文式 摆摩利状文(2本・2道止め)	被然実測	Ⅲ区, H15.5, K
36	拘生	漆	13.7	-	(11.6)	ヘラシガキ		摩利状文(口本・2道止め) 摆摩利状文	完全実測	Ⅱ区
37	拘生	漆	16.1	-	(12.1)	ヘラシガキ		摩利状文(口本・2道止め) 摆摩利状文	完全実測	Ⅱ区
38	拘生	漆	19.2	-	(9.0)	ハケメの残るナダ→口上辺ヨコナダ		摩利状文 摆摩利状文(口本・2道止め)	被然実測	Ⅲ区 ケン
39	拘生	漆	14.5	-	(9.0)	ハケメ→ヘラシガキ		摩利状文 摆摩利状文(口本・2道止め)	完全実測	
40	拘生	漆	04.0	-	(12.0)	エガキ		被然状文(本体・2道止め) 摩利斜走文(8本)	被然実測	Ⅱ区
41	拘生	小型漆	19.0	-	(8.0)	エガキ		□年 多摩状文(8本)	被然実測	Ⅱ区
42	拘生	台形漆	-	16.0	(5.0)	エガキ→黒色地紋		□年	完全実測 表面地紋	Ⅱ区
43	拘生	漆	-	-	-	エガキ		被然状文	被然実測(拓本)	Ⅱ区
44	拘生	漆	-	-	-	エガキ		被然状文	被然実測(拓本)	Ⅱ区
45	拘生	漆	-	-	-	エガキ		周面△エガキ	被然実測(拓本)	Ⅱ区
46	拘生	漆	-	-	-	エガキ		周面△エガキ	被然実測(拓本)	Ⅱ区
47	拘生	漆	-	-	-	エガキ		周面△エガキ	被然実測(拓本)	Ⅱ区
48	拘生	土器	8.4	4.9	8.0	ハケメ 内壁△ナダ	口縁コロナダ 側面から底面ナダ	△ハケメ△ナダ 摩利斜走文(本体) 摆摩利状文	完全実測	
49	拘生	無漆漆	11.0	-	-	ナダ	ヘラシガキ		被然実測	Ⅱ区

H16	種類	基準	法 異				成形・調整・文様		規定寸法(現寸幅×丸孔)	
			寸法(単)	高さ(単)	基高(単)	内 面	外 面	規 号	出上位置	
1	拘生	高所	21.2	10.2	16.9	平面 ハラシガキ→赤鉄 裂部 ハケメ	ハラシガキ→赤鉄 ハラシガキ→赤鉄	完全実測	IV区	
2	拘生	高所	-	9.4	(8.9)	平面 ハラシガキ→赤鉄 裂部 ハケメ	ハラシガキ→赤鉄	完全実測	I区	
3	拘生	審	-	-	(18.6)	ハケメ 刺繡	△彫刻赤鉄 ハラシガキ 円形容板文(4ヶ所) ハラシガキ→赤鉄	完全実測	I区	
4	拘生	審	-	-	(25.0)	ハケナダ	標準 ハラシガキ→赤鉄 裂部 ハケメ	刺繡	II区	
5	拘生	審	-	14.2	(8.6)	刺繡	ハラシガキ	完全実測	II区	
6	拘生	審	-	16.0	30.0	上面 ハケメ 下面 ナデ 下半部に2ヶ所の被修用の點上塗付	標準横板文 横板垂下文(7本) ハラシガキ	完全実測		
7	拘生	審	62.0	-	(12.3)	ハラシガキ	口縁・側縁 横波状文 標準 横板垂下文(3ヶ所付) 下部 ハラシガキ	刺繡実測	IV区	
8	拘生	審	62.0	-	(10.0)	ハラシガキ	口縁・側縁 横波状文 標準 横板垂下文(3ヶ所付) 2道目 ハラシガキ	刺繡実測	IV区	
9	拘生	小型張	8.1	5.1	9.5	ハラシガキ 赤韻斜紋付	口縁・側縁 横波状文 標準 横板垂下文(10ヶ所付) 下部 ハラシガキ	完全実測		
10	拘生	小型張	8.9	4.3	9.6	ハラシガキ	口縁・側縁 横波状文 標準 横板垂下文(10ヶ所付) 下部 裂部	完全実測		
11	拘生	審	62.0	1.4	29.2	ハラシガキ	標準 横板垂下文(9ヶ所付) 口縁 横波状文 下部 ハラシガキ	完全実測		
12	拘生	右肩張	11.0	8.2	15.5	ハラシガキ オリ付	標準 横板垂下文(7本) 口縁 裂部 ハラシガキ	完全実測	IV区	
No.	圖 種	真 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備考		出上位置	
13	右脚	鑄石	9.6	6.8	2.7	247.96	被熱なし。縫辺に錆斑		IV区	
14	右脚	鑄石	8.0	6.3	3.4	253.63	被熱なし。正面と両側面に錆斑		III区	

H20	種類	基準	法 異				成形・調整・文様		規定寸法(現寸幅×丸孔)	
			寸法(単)	高さ(単)	基高(単)	内 面	外 面	規 号	出上位置	
1	拘生	審	04.09	-	(12.0)	ナデ	ハラシガキ 口筋→赤鉄	刺繡実測 I. 251→側縁	I区	
2	拘生	飾	04.09	-	(5.6)	ナデ	ハラシガキ 口筋→赤鉄	刺繡実測 I. 251→側縁 穿孔地接 外縁→2	I区	
3	拘生	高所	-	04.08	(12.0)	ハケナダ ナデ	ハラシガキ 裂部	刺繡実測		
4	拘生	高所	-	8.4	(8.0)	平面 ハラシガキ 裂部 裂部 ハケ日 ナデ	ハラシガキ 裂部	完全実測	B区	
5	拘生	審	Q9.00	-	(9.0)	ハラシガキ 鑄石	ハラシガキ 裂部	刺繡実測	II区	
6	拘生	審	00.23	-	(26.6)	ハラシガキ ナナデ 口縁→裂部 裂部	ハラシガキ 裂部 標準 ハラシガキ 横板垂下文(大出付)	完全実測		
7	拘生	審	-	-	(12.0)	刺繡	ハラシガキ 裂部	刺繡実測	II区	
8	拘生	審	-	-	(19.6)	ハラシガキ ハナデ	ハラシガキ 裂部 標準 横板垂下文(6ヶ所付)	完全実測		
9	拘生	審	-	-	(17.0)	ハラシガキ ハナデ	ハラシガキ 裂部 標準 横板垂下文(7本)	刺繡実測		
10	拘生	審	-	(10.0)	(12.2)	ハケ日	ハラシガキ 正反面 ハラシガキ	刺繡実測	I区	
11	拘生	飾	62.25	-	(6.1)	ハラシガキ	標準 横板垂下文(10ヶ所付)	刺繡実測	I区	
12	拘生	飾	9.0	53.0	11.9	ハラシガキ	標準 横板垂下文(7ヶ所付) 底部 ハラシガキ 倒部 横板垂下文(8本付)	刺繡実測	I区	
13	拘生	飾	07.25	-	(12.5)	ハケ日	標準 横板垂下文 横板垂下文(8本付)	刺繡実測	II区 M4	
14	拘生	飾	-	-	-	ハケナダ ハラシガキ	標準 横板垂下文 横板垂下文(8本付)	被熱実測	I区 II区	
15	拘生	飾	-	-	-	ハケナダ ハラシガキ	標準 横板垂下文 横板垂下文	被熱実測	II区	
16	拘生	飾	-	-	-	ハケナダ ハラシガキ	標準 横板垂下文	被熱実測	I区	
17	拘生	飾	-	03.00	(9.2)	ハケ日	ハケ日→ハラシガキ 底部 ハラシガキ→ハラシガキ	刺繡実測	I区	
18	拘生	飾	-	6.7	(5.0)	ハラシガキ ハラシガキ	ハラシガキ 底部 ハラシガキ	完全実測	I区	
19	拘生	瓶	Q9.00	-	(13.5)	ハラシガキ	ハラシガキ	刺繡実測	I区	
20	拘生	瓶	07.00	86.00	12.7	ハラシガキ 底部 ナデ	ハラシガキ	刺繡実測 孔径 0.0	I区	
21	右脚	鑄石	16.3	8.0	(4.6)	(319.23)	被熱なし。部大歯 両端部に錆斑		I区	
22	右脚	鑄 石	10.5	5.5	2.9	(279.04)	被熱なし。すりぬけ 両端と側面に錆斑		I区	
23	右脚	鑄 石	9.0	6.3	2.4	(308.80)	被熱なし。すりぬけ 両端に錆斑		III区	
No.	圖 種	真 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備考		出上位置	
21	右脚	鑄石	16.3	8.0	(4.6)	(319.23)	被熱なし。部大歯 両端部に錆斑		I区	
22	右脚	鑄 石	10.5	5.5	2.9	(279.04)	被熱なし。すりぬけ 両端と側面に錆斑		I区	
23	右脚	鑄 石	9.0	6.3	2.4	(308.80)	被熱なし。すりぬけ 両端に錆斑		III区	

種別	器種	法 番			成 形・調 整・文 種			測定値() 保存番号	備 考	出土地
		口径(奥)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面				
D11	土器跡	井	0.200	-	(3.2)	ロフナナダ	ロフナナダ	回転式窓		
No.	直 線 素 材	鋸大底	鋸大唇	鋸大厚	直 線			備考		出土位置
D1	合模製品	不明	(5.0)	(6.0)	(9.5)	-	-	両面火照		
No.	直 線 素 材	鋸大底	鋸大唇	鋸大厚	直 線			備考		出土位置
NH	石器	磨-石	17.0	6.2	4.8	被熱なし、すり面	上側面と側面に磨打痕			
No.	石 器	磨-石	8.7	8.3	8.7	被熱なし	正面に磨打痕	備考		出土位置
P12	石器	磨-石	9.3	9.7	4.0	被熱なし	正面に磨打痕			
P21	合模製品	角形	6.0	(1.0)	(1.0)	-	-	両面火照		
P22	合模製品	角形	6.0	(1.0)	(1.0)	-	-	両面火照		

Gr	種別	器種	法 番			成 形・調 整・文 種			測定値() 保存番号	備 考	出土地
			口径(奥)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面				
1	灰陶跡	瓶	6.0	(2.1)	ロフナナダ	瓶身	ロフナナダ→凹輪底部切口→高台基付 斜輪	光北米蔵	H20-2		
2	素燒跡	蓋	(9.0)	-	(1.0)	ロフナナダ	ロフナナダ 天井部 凹輪+ハケ穴	回転式窓	ホ-8		
3	素燒跡	有台杯	0.60	7.2	3.3	ロフナナダ	オフナナダ 切口部後 千尋立ハラクスリ→高台基付	光北米蔵	ホ-8		
4	素燒跡	井	0.30	5.0	4.1	ナダ	ナダ+すす付	ロフナナダ→凹輪底部切口	回転式窓	ホ-11	
5	素燒跡	井	0.12	5.0	3.5	ナダ	ロフナナダ→凹輪底部切口	回転式窓			
6	素燒跡	短筒壺	0.60	9.1	14.8	ロフナナダ	ロフナナダ 井 休部 平行タテキ	光北米蔵	セ-22		
7	土器跡	井	0.62	0.52	4.6	矮丈	ヘラタマズリ	回転式窓			
8	土器跡	井	0.92	-	(1.0)	ヘラナダ	ヘラタマズリ	回転式窓	セ-22		
9	陶丈	-	-	-	-	-	陶丈(8.0)	定企工場	H18-1		
10	陶丈	盖	0.40	-	(0.0)	ヘラヒガリ 黑色地顔	ヘラヒガリ	定企工場 他成形 穿孔(4+4)	オ-7		

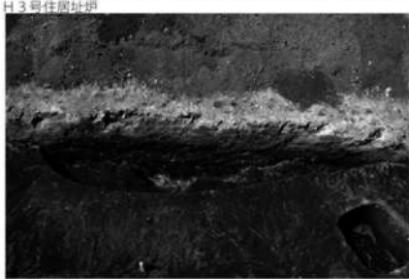
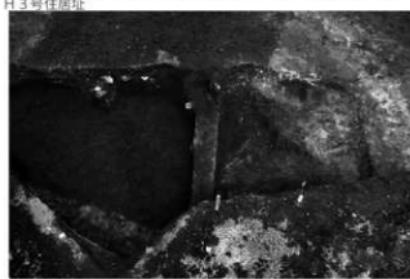
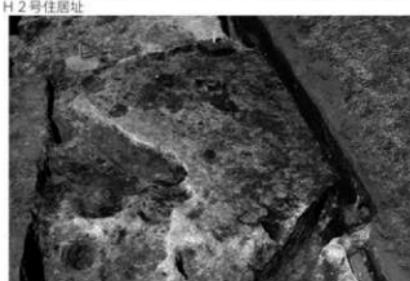
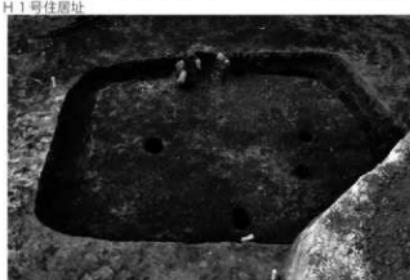
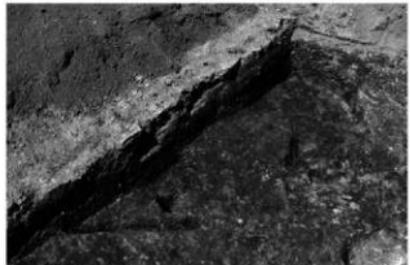
第III章 調査の成果

今回は一昨年に引き続き大豆田地籍を調査した。その結果、前回の調査では解らなかった周辺部の遺跡立地の相違が明らかとなってきた。本章ではそれらの点を中心とまとめ調査の成果とした。

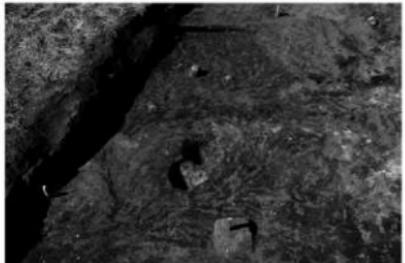
今回の発掘調査では、ほぼ同一面積を調査した東側に接する大豆田遺跡Vと大きく様相を異にした。まず第一点として遺構の検出状況が大きく変化している点である。V地区では竪穴住居跡5軒の調査に止まつたが、今回の調査では22軒が検出された。特に北側の調査区では12軒の住居が複雑に重なり合い、弥生時代後期から平安時代に及ぶ長い期間集落として利用されていた様子が窺えた。このことは北に接して調査されたVII地点でも同一状況であった。これとは対照的に東側に連続する大豆田遺跡Vや道常遺跡II・III、同じく道常遺跡IVのエリアは古代の住居が非常に少なく、継続的な古代の集落形成は確認できなかった。これらのエリアからは中世所産の遺構が多く発見され、時代的には13～14世紀代の生活活動エリアと考えられる。

近接する遺跡でこのように歴史的な環境が大きく変わるのは、地形の形状が係わっていると考えられる。東側のエリアはいずれの遺跡も調査中から湧水が激しかった。遺構確認面は通常の浅間火山灰層いわゆるP1層であったが、覆土を掘り込むと数センチで湧水が確認された。西側エリアは地形的に田切に落ち込む側であるが、厚い砂層の堆積もあり湧水は今回調査のD2号土坑の底面で確認されたに過ぎない。この事から標高的には高い東側エリアは、扇状地形末端の結果か湧水面が高く住居を構築しての集落形成に不向きであったと考えられる。このような理由が遺跡立地を左右したのではないだろうか。今後、周辺部開発にあたってはこの成果が遺跡保護に十分に生かせることになるであろう。ただ、なぜ湧水エリアに中世の生活域が移るのかは現状で不明であり、立地する遺構の種類や出土遺物の特徴から今後考えていかなければならない課題である。

もう一つの大きな調査成果である多文字を記した「刻書石製錘錘車」については紙面の関係で触れることができなかった。改めて別校としたい。以上雄駄であるが今回の調査成果としたい。



図版 2



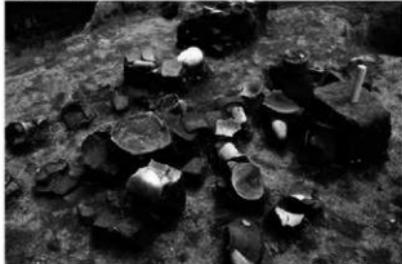
H 7号住居址



H10号住居址



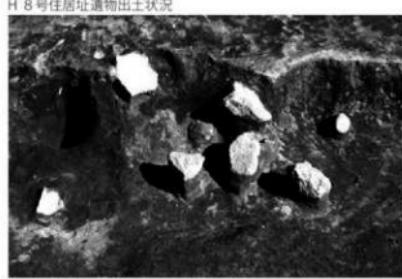
H 8号住居址



H 8号住居址遺物出土状況



H 9号住居址



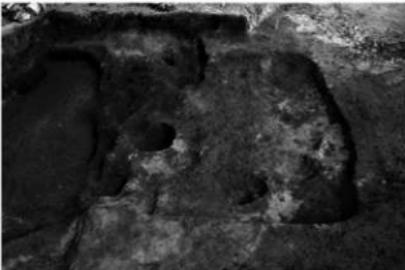
H 9号住居址カマド



H12号住居址



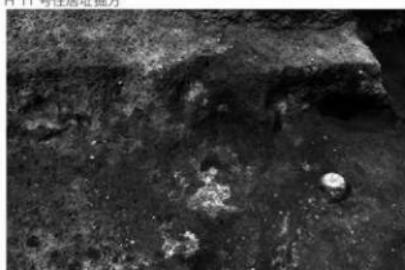
H 11号住居址



H 11号住居址掘方



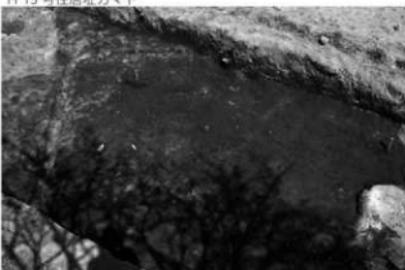
H 13号住居址



H 13号住居址カマド



H 14号住居址



H 15号住居址



H 16号住居址



H16号住居址遺物出土状況

図版 4



H 17号住居址



H 18号住居址



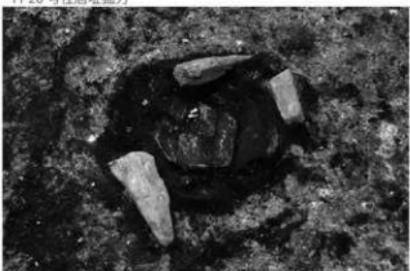
H 19号住居址



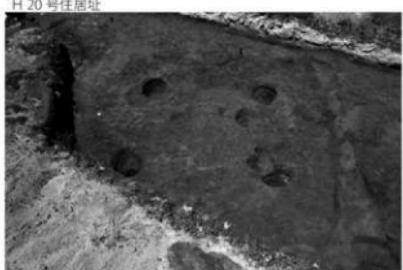
H 20号住居址掘方



H 20号住居址



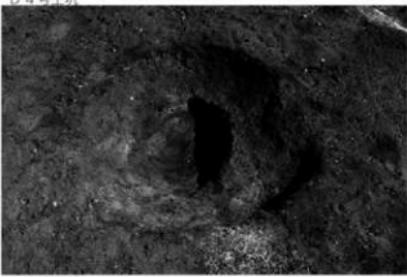
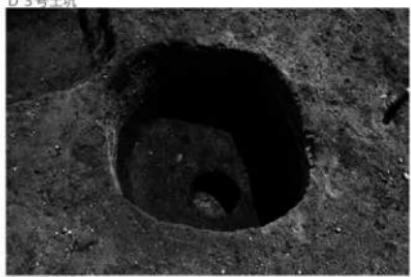
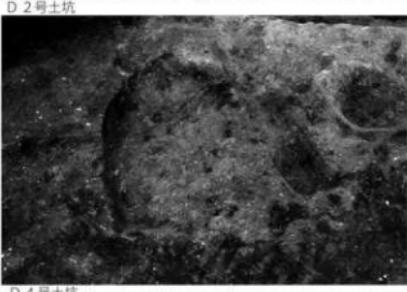
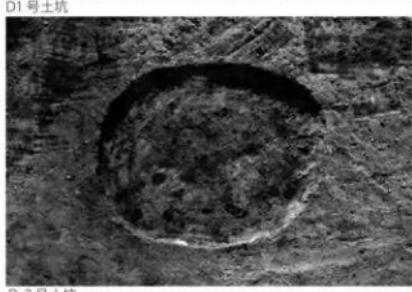
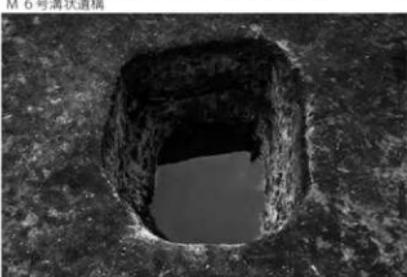
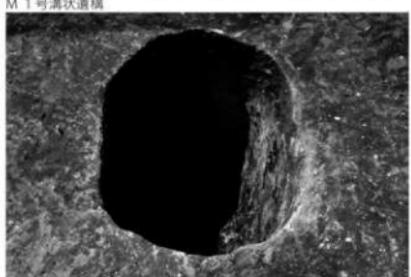
H 20号住居址掘方



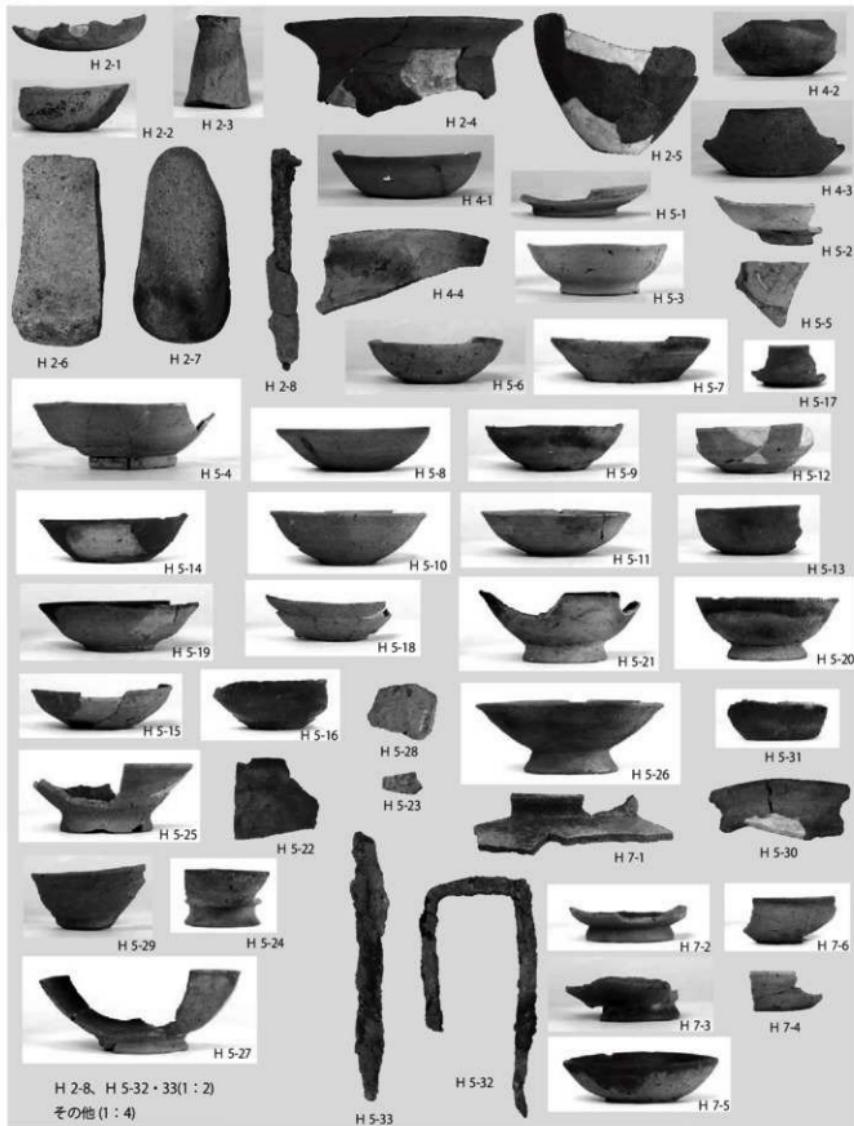
H 21号住居址

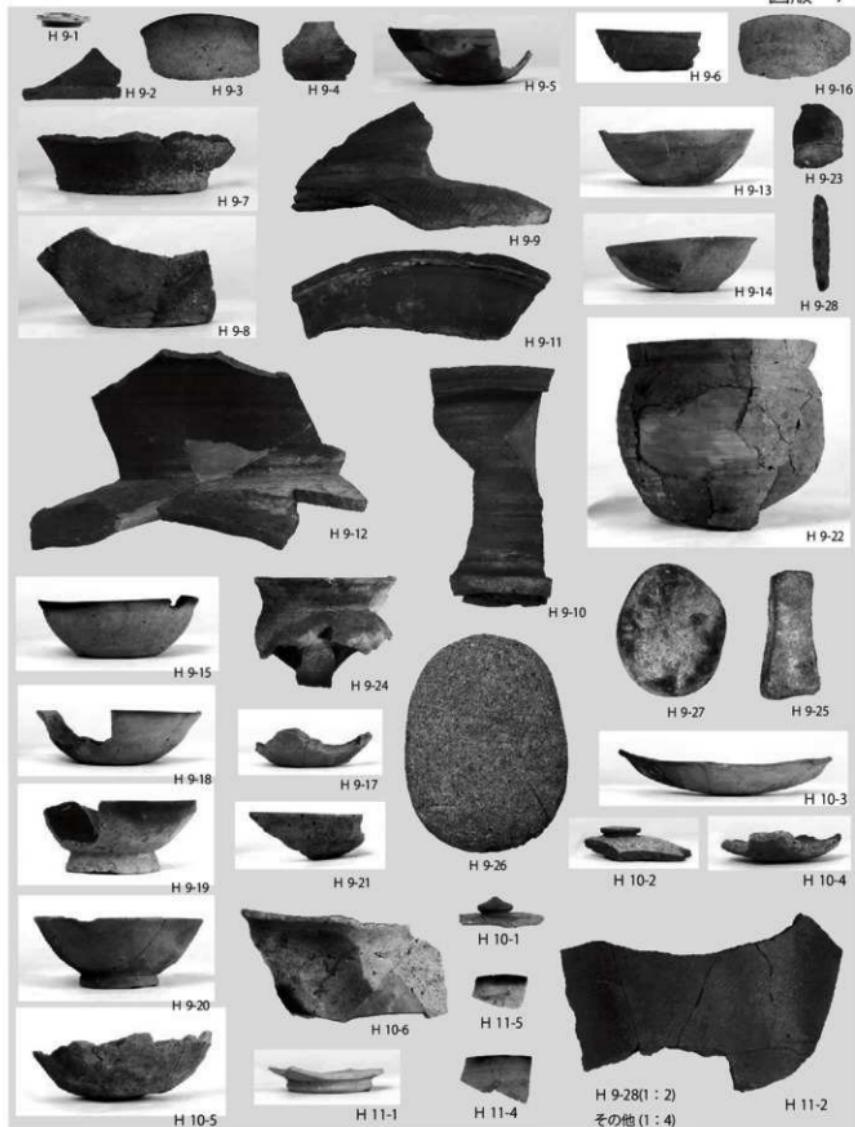


H 22号住居址



図版 6





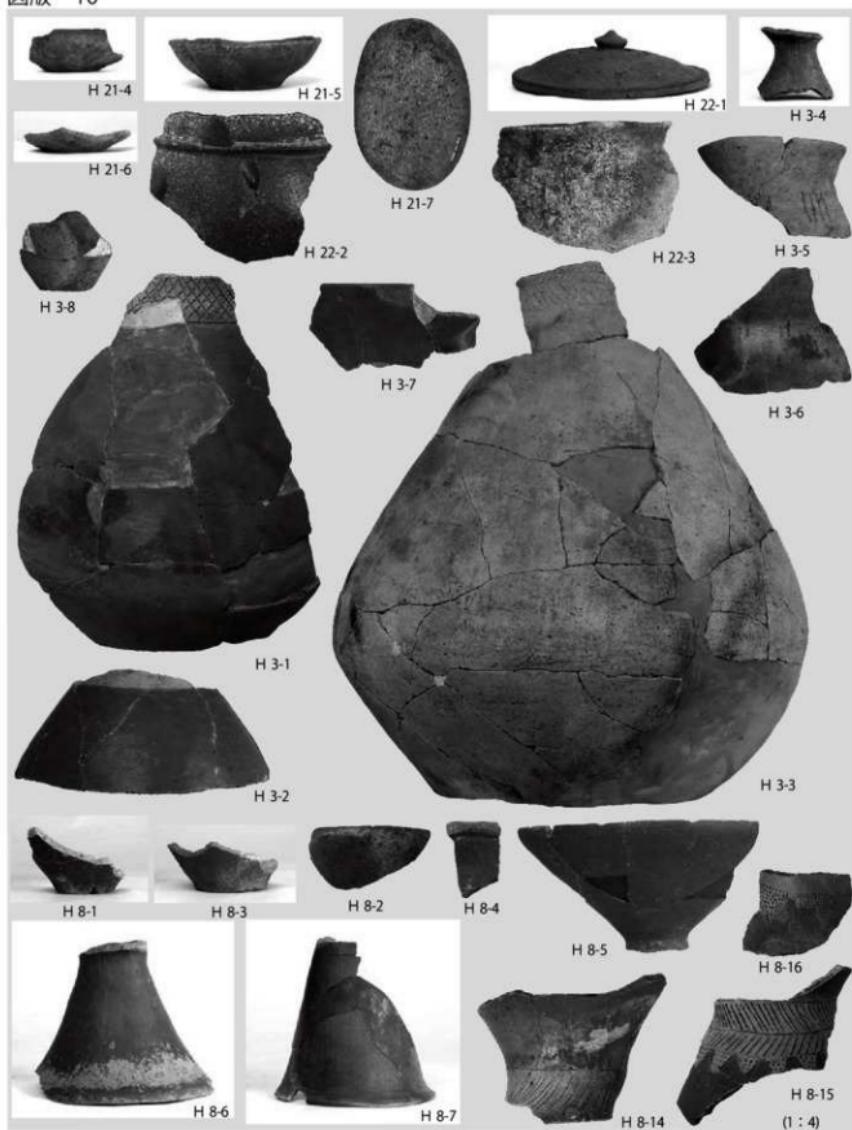
図版 8



図版 9

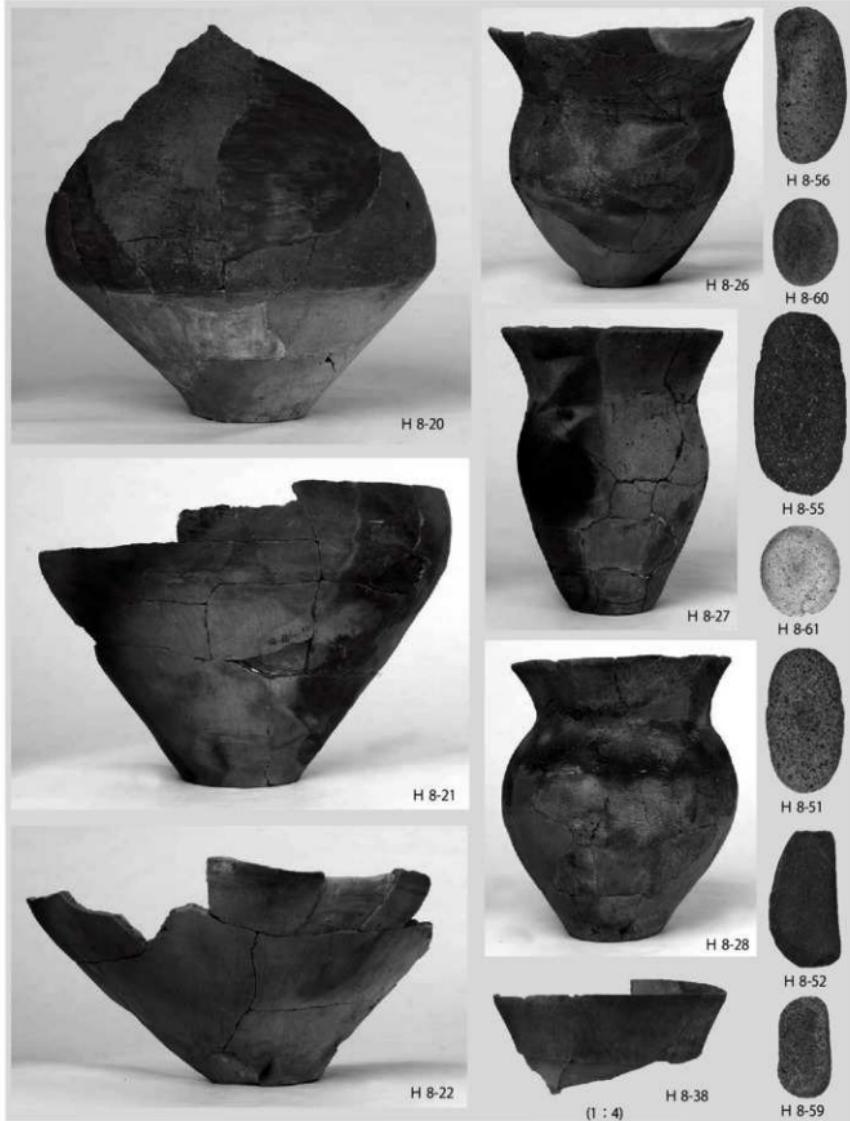


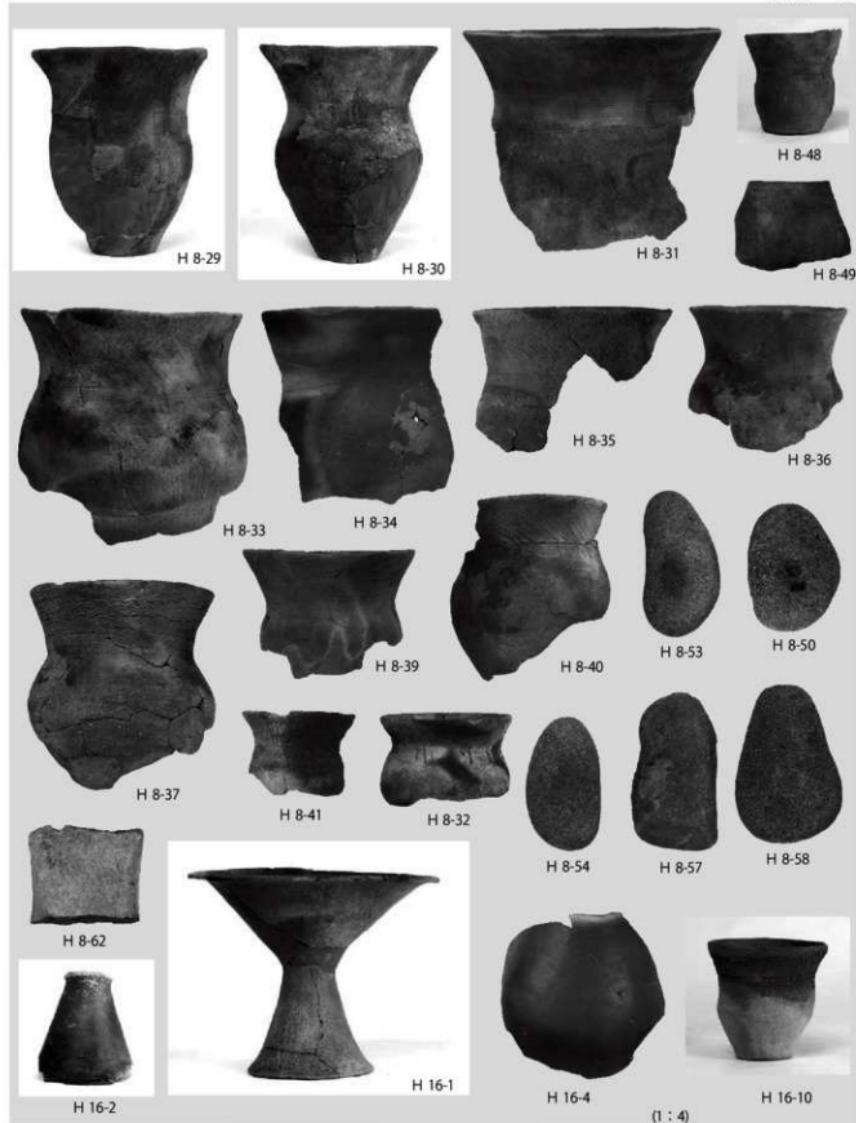
図版 10



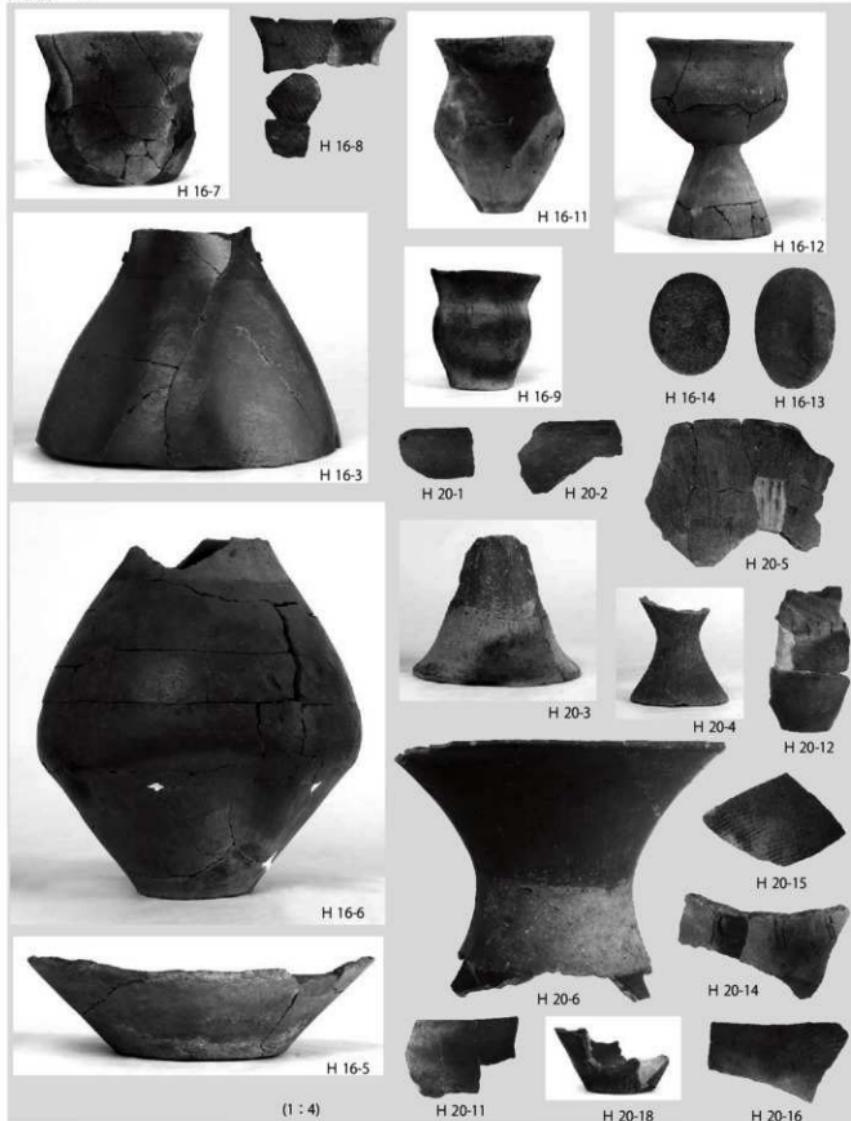


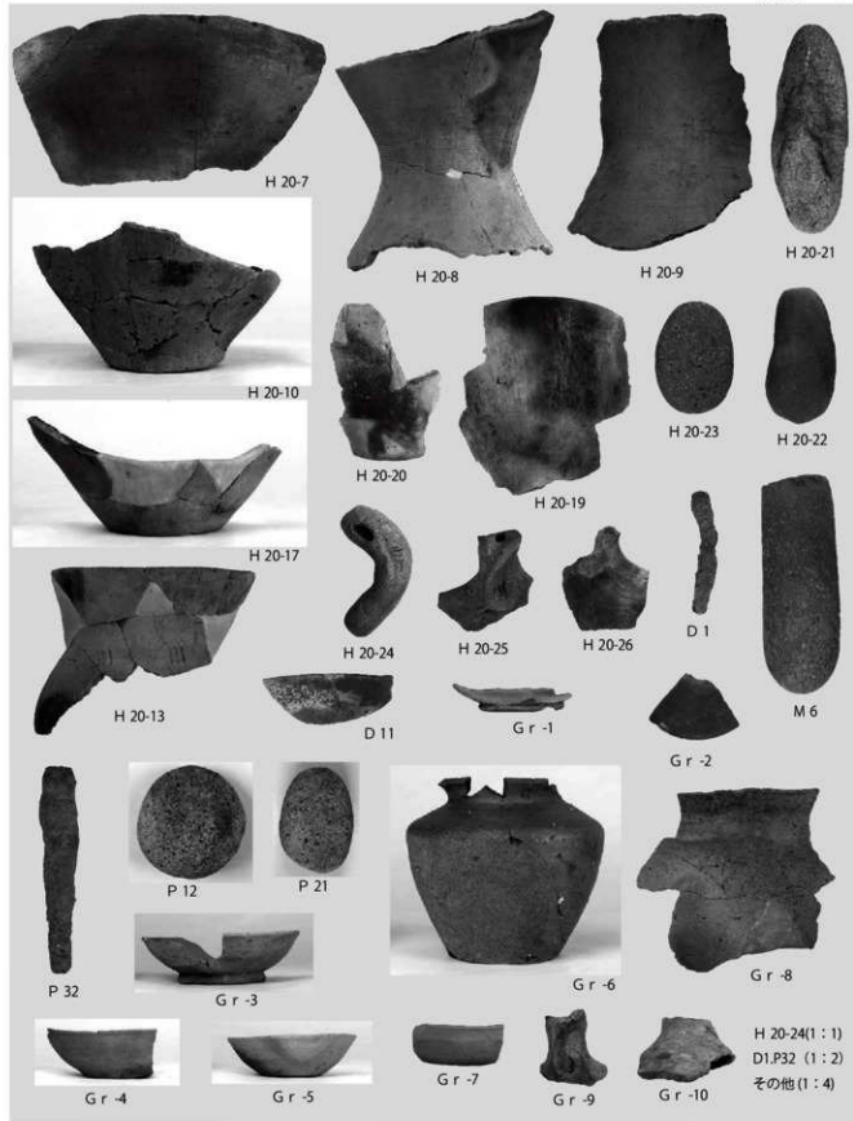
図版 12





図版 14





報告書抄録

ふりがな	すばうばたいせきぐん だいすたいせきろく							
書名	周防畑遺跡群 大豆田遺跡VI							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第274集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	2021年3月							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
すばうばたいせきぐん だいすたいせき ろく 周防畑遺跡群 大豆田遺跡VI	さくしながとろ 佐久市長土呂 1725 他	20217	7	36° 16.55'	138° 27.29'	20190404 ～ 20190510	600	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
周防畑遺跡群 大豆田遺跡VI	集落址	弥生 奈良 平安	住居址 土 坑 溝状遺構	22軒 13基 7本	弥生土器 土師器 須恵器 石製品 鉄製品			
要約	沖積地に舌状に飛び出す台地上に展開する古代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に弥生時代から奈良・平安時代と考えられる住居跡が検出された。調査された遺跡周辺部は部分的に流水によると考えられる砂層が堆積し、弥生後期の遺構はこの砂層下より検出された。長野県内では希少な「刻書紡錘車」が出土した。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第274集

周防畑遺跡群 大豆田遺跡VI

2021年 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

印刷所

キクハライク有限会社